

赤生向日之

*4号 10/21

戦時組織への再編

P.1

赤色救援会運動の再編と今日の反撃在戦線

P.5

高原同志の公開質問とそれに対する

赤軍派都委員会の解答

P.9

綱領論争が開始された！ 経済主義批判

- 赤生隆文 - P.11

日本社会3革命の大衆運動へ

発展は開拓の問題と

- 立石進治 - P.21

150回

赤軍派都委員会

戦斗組織への再編

一、「九・一六一三里塚を闘う人民大集会」は日比谷

公開堂に五千の革命的プロレタリアート。農民・学生をひきよせて開催された。集会は始めから終りまで熱気に満ちており、そこぶる感動的であり、参集した人々ひとりひとりに深く感銘をあたえずにはおかなかつた。この

深い感銘は、革命的人民の闘いへの気迫が、唯人々の心の中によび起す事のできる種類のものである。この感動的な集会は三里塚農民が、七年に渡る闘いの中で、つ

ちかつて来た勇氣、気迫、たくましさ、柔軟さ、罵喰すべき程の独創性や、工夫と、彼らの持久的な闘いへの気構えとが、かもしだした一大父輩田に他ならない。

ところで、この集会は、我々とつて極めて教訓的であつた。集会は、長い間忘れてきたもの、確かに口先では何回となく復唱しはじたが少しも中味のともなわなかつたもの、我々が旧米の運動に対する総括作業において何回となく反省し確認した上で、それを全運動の基礎にすえ様と努力してきたものを、確固として認める事を要求し、又、一体そらする事は如何なる事態なのか、とい

う点までをも鮮明にしたのである。つまり集会は、人民大衆に依拠し、彼らを忠いきつて立めがらせるといつたり、人民の力強いたい動が始まつたことを見過す事はできない。三里塚農民・沖縄人民の闘いにこの事はよく示されている。そしてこの底深いたい動の広がりは、最近の相模原での米軍戦車輸送に対する阻止行動において遺憾なく發揮されている。

相模原闘争においては、闘いに決起した人民はほんの一ヶ月の間に実際に多くのものを経験し、そこから学び、それを実践の中に生かした。この闘いは、安保条約と国法とのズレを巧みについた社・共が先駆をつけて、続いて急速に革命的左翼が介入した。しかしながら大衆は、法律上のギヤップは政府によつて早晚埋められるだろうと予期していた。それに、政府は、いずれせよ力をつて推し切る事もできるのだ。だから彼らは直接、番組の事と考えた。つまり、闘いとはこういう事なの

と、いう誤だ。

こうしていつもの様に政府が人民の声にちよつとでも耳を傾けその事をいかにも考へているという風をし、社・共の事は、

私が喜んでおされてしまつた時、(彼らは実の處に)も適当なところで手が打たれるのをまち望んでいるが、(が)結局の処例も事態はかわつてもいいし、一例だが

されてしまつた時、大衆は最先に先頭に立つて坐りこんでこれを止め様としたのだ。大衆のこの精神と意識の急速な激化を看大共が必死になつてけちらそとした事は、いうまでもない。

相模原闘争で大衆は又、幾つかの左翼潮流を何んなく分けた事が出来たばかりか、彼らの判断を実践に移すをいとはなかつた。彼らはプロレタリア執政の党派がプロレタリア失政の党派であるとして共産党の現斗メント

に一挙を加え、年マルをせん勤し、彼らに闘いの手はどうをきをし、いがみ合ひ互いに不必要な衝突をする左翼革命と謀反を平直につたえてゐる。底深く力強い人民のためにも、相模原闘争もつまる處、今日の日本階級斗争の諸特徴は、就一行動をとる様に忠告した。これらは、どう考えても過格な、理にかなつた判断と実践ではないだろうか

に一挙を加え、年マルをせん勤し、彼らに闘いの手はどうをきをし、いがみ合ひ互いに不必要な衝突をする左翼革命と謀反を平直につたえてゐる。底深く力強い人民のためにも、相模原闘争もつまる處、今日の日本階級斗争の諸特徴は、就一行動をとる様に忠告した。これらは、どう考えても過格な、理にかなつた判断と実践ではないだろうか

に一挙を加え、年マルをせん勤し、彼らに闘いの手はどうをきをし、いがみ合ひ互いに不必要な衝突をする左翼革命と謀反を平直につたえてゐる。底深く力強い人民のためにも、相模原闘争もつまる處、今日の日本階級斗争の諸特徴は、就一行動をとる様に忠告した。これらは、どう考えても過格な、理にかなつた判断と実践ではないだろうか

に一挙を加え、年マルをせん勤し、彼らに闘いの手はどうをきをし、いがみ合ひ互いに不必要な衝突をする左翼革命と謀反を平直につたえてゐる。底深く力強い人民のためにも、相模原闘争もつまる處、今日の日本階級斗争の諸特徴は、就一行動をとる様に忠告した。これらは、どう考えても過格な、理にかなつた判断と実践ではないだろうか

に一挙を加え、年マルをせん勤し、彼らに闘いの手はどうをきをし、いがみ合ひ互いに不必要な衝突をする左翼革命と謀反を平直につたえてゐる。底深く力強い人民のためにも、相模原闘争もつまる處、今日の日本階級斗争の諸特徴は、就一行動をとる様に忠告した。これらは、どう考えても過格な、理にかなつた判断と実践ではないだろうか

に一挙を加え、年マルをせん勤し、彼らに闘いの手はどうをきをし、いがみ合ひ互いに不必要な衝突をする左翼革命と謀反を平直につたえてゐる。底深く力強い人民のためにも、相模原闘争もつまる處、今日の日本階級斗争の諸特徴は、就一行動をとる様に忠告した。これらは、どう考えても過格な、理にかなつた判断と実践ではないだろうか

運動をプロレタリアートの権力奪取に向けたがつちりと組織し指導するのではなく、どちらかといえば運動にのみりこみ振り回されてしまう様な弱い組織、大衆の広範な反撃と充分手を結ぶ事もできない組織、内部的なつまりがみ合いで精力を消耗してしまった様な分散的組織、マルクス・レーニン主義を確固とした基礎におくのではなく、あやふきな多分にやくざな思想に依拠している組織、こうしたものではない、これとは全く反対の革命家、の組織が必要なのである。強固な革命家の組織の必要性は、革命的左翼の内部にも、広範な大衆にも痛切に感じられてきているものである。

そこで、今存在する革命的左翼の組織を直ちに一本化することは、などといひ事は不可能に違いない。強固な革命家の組織の必要性は未だ必要性一般として存在しているにすこないじ、互いに政治上の原則が一致している訳では少しもないからだ。だからここでは先ず、互いに足をみをうかる事が必要であり、ここから始めなければならぬ。

ところで、二月三月の破滅的な事件より幾分か早く、我々は内部的な論争の組織化、及び解体されつくしていた各方面機関の再建にとりかかつた。そして幾分かの右余曲はめつたにせよ、我々は着実に進んできた。この間に我々がせおつて来た中心的な任務は旧来の理論と実践を本的に再検討する事、マルクス・レーニン主義の観点から出生論と実践をマルクス・レーニン主義の基礎の上に確固として打ち立てる事であつた。我々はこ

つした行動をつうじてのみ、日本革命運動の再編と発展の一翼を担う事ができると考えたのである。

当初から論争は激烈にたたかわされた。それは悪戯か逃がれるにあたつて適切な方法だつたに違いない。

論争の中心点は必ず専ら論争の形式に偏してのものだた。組織は解体しているか、目前から消えさつていたで、誰が何處で誰に何を話すのか皆目定める事はできなかつたからである。組織的な系統的な論争の展開の必

とが対立した。続いて組織的な系統的な論争は直ちに再建の任務と不可分なのだが、では一体、組織再建といがにどの様なテンポで進めるかが問題となつた。充て、この点に關する成否は明白である。歴史上において、自ら消えるのでないならば、この様にしてのみ我々は論と実践を正しい方向で評価できよう。

もちろん、ここで理論上の論争が中断していく訳ではない。当時「再生に向けて第一号」は、我々の論一つの帰結であり、又その水準を示していた。しかし、それが、それはより激しい論争をひき出す呼び水になかつた。

論争の中軸はかくして旧来の運動の破滅の原因、即ちの運動についての厳格な計画と、如何なる運動を丹念してゆくべきかに移行した。ここでは赤軍派出生以来、理論と実践の全体が、その自滅・破滅と密接にからみ合

てゐるという分析と、赤軍派の破滅は（破滅を認めるか否かに關しても一論争はあつたが）主に中央軍建設という大衆に依拠しない狭い軍建設にあつたという分析とが対立した。旧来の運動は典型的な左翼空論主義であり、車掌力学主義であつたという評価と、旧来の運動全般を組織的に展開し、強固な革命家の組織建設に集中すべきであるという方針と、大衆に依拠しはするが全く無視する方針とが対立した。当面、

漠然と擁護しようとする傾向とが対立した。当面、これを組織的に展開し、強固な革命家の組織建設に集中すべきであるといひ方針と、大衆に依拠しはするが全く無視する方針とが対立した。當初、

論争はもつと細かな一つひとつ問題をめぐつて、又根底から再検討する必要がある、という論争の到達点をふまえ、分析に磨きをかけ、それをより豊富にし、何とかかる党派は生みだされ、それは日本の革命運動の中でいかなる役割を果してたのか、今まで論争を広げてた。「再生に向けて第三号」では、総括論争の骨骼と方向をはつきり打出す事ができた。続いて第三号では、米の赤軍派の思想・組織・戦術を鮮明に分析し、評議する事ができた。

他方総括論争を進行させる一方、自らを革命家の組織として鍛えて行く為に、又総括作業を拡大し、検証しゆく為に、現実の政治・経済闘争を組織し、大衆をそれに決起させる様努力してきた。赤軍派は最後には、一つ残らずといつていい程、大衆斗争、大衆戦線を切って、そこから召還してしまつて行ったので（どうした結果）、況は全く信じられない事だが真実である。この作業は特別意義深いものであつた。しかしこれはばなばた困難な作業である。何故ならば、そこではすでに革命的大衆との結びを失つてしまつた。しかし、これはばなばた困難な作業である。何故ならば、そこではすでに革命的大衆の方針、その経験は短時日の内に簡単に獲得されはしない。又、自らが無視し放りだしで来たものを急に思いおこし、体系立てて役立てる事も簡単にできはしないのだ。とも角、ここでは地道な一步一歩の足運びが必要だつたのだ。

総括論争と新たな組織再建の作業は、こうして遙々とあるにせよ着実にすすんできた。そして今日、ようやく再建活動におけるサークル的な組織から、戦闘組織、宣伝・せん動組織へと飛躍し衣がえする所にきている。日

本革命運動の再編において、どうにか足並みを揃える作業にとりかかる処まで来た訳なのである。

我々は現在総括作業を普遍化し、組織的に完遂すると共に、マルクス・レーニン主義の基本的な諸原則の下に、組織を打ち鍛え、綱領を確立する様に努力し、現実の諸情況に適合した方針をはつきりと打ち出すべきところへ来ている。

三、国際共産主義運動は、現在、疑いもなく再編期にある。そして勿論のことこの再編は米たるべき世界的規模での攻撃の組織だつた準備とななければならぬ。だから国際共産主義運動の今日における再編の政治的内容、及びその実践は極めて重要な課題となつてゐる訳なのだ。しかしながら、ベトナム労働党の論文「革命的潮流の勝利」の主張や、バレスチナ・ゲリラの国際的なテロリズムへの傾斜は、国際共産主義運動の今日における再編が、多大に問題を含んでおり、国际反革命体制に対する組織的で系統的な攻勢が、実現できるか否か?に關しての卒直な危惧と警告の表明である。八月に発表された「革命的潮流の勝利」は、現在急速に進行している国際共連主義運動の再編に根底から問題を提起し、再編の中心である中国共産党の一連の外交政策に卒直な危惧をのべ、現在におけるプロレタリア国際主義の内実を問うた。一方、イスラエルを突撃隊とした国際反革命勢力におきられ、退却に退却を重ねレバノンをも今撤収しようとしているバレスチナ革命勢力は今大規模な党的再編のか中にある。そこでは強烈な反ユダヤ主義が大衆の心を把握と同時に民族急進派が台頭し、この勢力は急速にテロリズムへ傾いたのだった。テロリズムはだから窮地にたつたバレスチナ革命勢力のケイレンなのだ。テロリズムに対して原則的に反対する事は正しい。しかしバレスチナ革命勢力の一部のテロリズムに対しても批判を加えるだけではそれは甚だ不充分な行為であり間違つてさういよう。何故ならば彼らのテロリズムはイスラエルを突撃隊とした国際反革命勢力に国際共産主義運動が強く有るに對決しなかつた帰結だからだ。ここでもすぐれていふ。可避の没落の帰結である。これら一連の平和共存政策は、帝国主義列強との平和共存、緊張緩和を実現している。これらといわゆる平和勢力の鬭いの成果であり、帝国主義の不可避の没落の帰結である。一連の緩和策は、列強と国際共産主義運動再編の目である中国共産党は、昨年二月ソソン訪中による米中接近、今年の日中国交回復について、帝国主義列強との平和共存、緊張緩和を実現している。これら一連の平和共存政策は、帝国主義の反革命体制の全面的な反革命・侵略政策に一定の歯どみをふすものであり、(この歯どめはインドシナ・ベトナムには及んでいない。又歯どめを全く信じてしまふ出來ないのも勿論である。) 国際反革命体制に一定の歯どみ割れを生み、内部矛盾を激化させた。

六〇年代後半以降のベトナム革命勢力の急速な進攻と、

七〇年、中国・朝鮮・ベトナムによる国際的な反帝統一戦線の結成とは、全世界での革命運動・反戦闘争を力づけた。他方、帝国主義の歴史的な没落のスウ勢は不可避であり、とりわけ米帝の力量の相対的低下には著しいものがつた。ニクソン政権はかかる諸問題の噴出と行きづおりとなり、必死に打開策・延命策を追求した。

かくして、国際反革命体制の「ニクソン・ドクトリン」による再編・結束強化、対中接近、平和共存の確認、ブレトンウッズ体制の崩壊とスマソニア体制の創出という国際通貨制度の改革、等々が、やつぎはやになされたのである。確かに、かかる延命策は問題を何事も根本的に解決しましないだろう。とはいえ、とうあえず彼らには息をつき、小康状態を保つ事には成功したのだ。対中には解消しませよ「くさひ」を打ち込み、その主要勢力中国との真正面からの敵突を避け、国内革命運動・反戦闘争の躍進をくじいた。由中政府も今日、この延命策を極めて忠実に踏襲している。こうした情況においても、帝国主義の本質は變りはないし、国際共産主義運動の前進と帝国主義の没落の歴史的すう勢をくつがえす事は固よりできない。帝国主義者の一時的な緩和策はベトナム・インドシナ全域へのより強化された陰陥な攻撃と少しも矛盾しないし、国内人にはかりか、逆にそれらと完全に一体のものであつてゐる。彼らはここで、ベトナム・インドシナ人民や各国民へのはおりねはり強いてごわい反撃から逃れられないし、彼らはこの通りである。おまけに彼らの緩和策は国際反革命体制に少くなくらぬヒビを入れた。つまり、ニクソンとユー・朴蔵との間に、且つ田中と小川・朴との間に、米の歴史的限界の鮮明な告白ではなくて一体何であろうか。日にとつては、このヒビわれよりも対中接近、国交回復の方かられる利益の方が大きいと判断した訳なのだ。クソン・ドクトリン」の破産の一例証であり、帝国主義の歴史的限界の鮮明な告白ではなくて一体何であろうか。帝國主義列強の緩和策が一定の功を奏し、小康状態を保ち、彼らが延命をより確実に一日でも長く計らうが為の強硬策や妥協を極めて陰陥な計算の下におし進もうとする事さを出来てゐるが、世界的な規模での革命運動のテツフへの万全の諸準備を果さなければならぬだろう。国際反革命体制の集中砲火が、ベトナム・インドシナ人民やバレスチナ人民にあびせられている時、それに対しで国際革命陣営の散發した砲火しか国際反革命体制に向けられていない時、国際革命勢力の集中した砲火を準備する事が必要なのだ。

国際反革命体制は各地、各国での革命運動を各個撲滅する事に専念心を碎いている。全世界プロレタリアート。

人民の國際的な銅鉄の様な團結が準備される前に片をつ

けようと彼らは必死になつてゐる。プロレタリアート。

人民の全世界的な銅鉄の様な團結はいまだ準備はされていない。それにもかかわらず、国際反革命体制は各地、各国での革命運動に何と手をやいてゐる事だらうか。

彼らの集中した砲火でさえも各個撲滅するには充分では

ない。しかし彼らの集中砲火は、革命運動を一時的に涌

めつけ、弱らせるには充分効果的である。だから、国际

反革命体制の集中砲火を準備する任務、これが

詠せられている任務なのである。もしも、国際反革命体

制の集中砲火をあらゆる機会をとらえ、少しでも弱らよ

うと努力しはするが、しかし、国際革命勢力の集中砲火

を準備するという任務を怠るならば、正に「それはおは

れる強盗に浮きふくろを投げ与える様なもの」となる。

【残念ながら今日、国際革命勢力の集中砲火を準備する

任務は、はかばかしくは進展していらない。国際革命勢力

の最大の勢力である中国共产党も、この集中砲火を準備

する任務に関しては、今日多大のあいまいさを残してい

ると言はざるをえないものである。】

(スローガン)

六十。二一ベトナム革命戦争支援へ自衛隊沖縄派兵阻止

防衛厅・アメリカ大使館大抗議戦争に結束しよう!!

◎全世界人民と團結し国際反革命体制を打倒しよう!!

◎インドシナ革命戦争を支援しよう!!

◎パレスチナ革命戦争を支援しよう!!

◎日米安保体制を打倒しよう!!

◎米軍基地撤去!!

◎沖縄自衛隊派兵阻止!!四次防粉碎!!

◎相模補給廠撤去!!戦車・装甲車搬出入阻止!!

◎入管二法粉碎!!

☆十一月パレスチナ国際戦争を成功させよう!!

四、わが国の革命運動において人々は、ここ三年ばかりの間に実際に様々な政治的傾向を一望出来る幸運に恵まれた。その最も華々しい傾向は、外でもなく我々自身の運動であり、左翼空論主義の傾向であつた。しかし、これはすぐに中味のない事が立証され、又客観的な政治的現象にそぐわなかつたので、見事に破産を遂げた。経済主義の傾向は今でもしぶとく残つてゐるばかりか、いかんでも貧困であり、セクト主義的だつたのでもなく、たゞ幾分テンプな勢力があつた。しかし、この勢力も革命運動はらんではいた。しかし、とも角この潮流は現在においでも損傷が少く、組織的な強さを誇り、日本革命運動の主力となつてゐる。

こうした中で、わが国の革命運動の再編は、ここ数ヶ月間に急速な進展をみせ始めた。旧米の政治傾向は大半に再編されつつある。この再編の中心は、蜂起・戦争の破壊・解体と、沖共闘・プロックの解体、「八・二五六院会議」プロックの創出である。それは行き詰つた車道筋であり、組織だつたう回を過格に果さんとする努

力の塊れに他ならない。

我々はかかる「八・二五共闘会議」プロックを撲滅しない。今日の国際共産主義の内実においては特にベトナム革命戦争支援戦争として具体的な一步をふみ出した。こ

の戦争はいまだ微々たるものであり、長大な過程を予想させるものであるが、かんせんと我々はこの比喩を使ひき

移さなければならぬだろう。その内実を鮮明に分析し、打出すと同時にそれを実践に準備する一端を担える勢力として鍛えあげなければならぬ。レタリア国际主義の内実を根本的に問うている。我々は

レタリア国际主義に對する「正規の攻撃」を構築し、集中砲火を

準備する事に中心があるとしていた。そしてそれを国際政

治闘争の組織化へ今日の情況においては特にベトナム革命戦争支援戦争として具体的な一步をふみ出した。この

の戦争はいまだ微々たるものであり、長大な過程を予想

させるものであるが、かんせんと我々はこの比喩を使ひき

うけなければならない。

共産同赤車派東京都委員会 救援対策部

はじめに

我々が参加している赤色救援会の運動は、連合赤軍誕生の歴史的地平上武装し、團結することにて依拠し、同時に主觀的にはどうであれ、客觀的には「連合赤軍」一派のゲリラに実踐的にも、論理的にも呼応してきた。したかつて、連合赤軍の敗北に直面し自己批判から始まる根本的な総括を要求されている。そこで、昨年十二月十八日に確定され、それ以降の本会の基本的行動綱領になつている「人民の軍隊一人民」の團結に向け、イ、「戦斗十弾圧十救援」の効果性を排し、「戦斗十工作十人生」の一体化による自力更生を、ロ、「合法十非合法」の閉鎖性（統一・急性）を排し、「公然十非公然」の一体化による、より大胆な宣伝を、より確実な工作を」も、「連合赤軍十一握りのゲリラ」十「革命戦争」路線に呼応したものとして評議、再検討されるべきであり、旧来の「革命戦争」路線を前提に問題を立て、論争をこの範囲内に限定し、せねばはじまつてはならない。百家齊放とは論争内容にあらかじめ枠を設定してこれをせねばることなく、全人民に開放し、系統的・組織的に貫徹していくゆくことであり、我々はたとえ遙々たる歩みであつてもそれを行なうべきなれはならない。

我々が「三・三一銃撃事件」後連合赤軍大暴動入力する事で「人民集会」以降「七・一五連合赤軍誕生一周年・政治論争集会」を経て今日までに獲得し得た認識は以下のところである。『連合赤軍・赤色救援会』總体としての敗北をしており、空想的であることを基本に「連合赤軍・一握りのゲリラ」を「人民の軍」と呼んでいたことは「人民の軍隊一人民」である。アーティストの暫時的・普遍的な任務を第一とする）革命的・自発的」とそれを認めた具体的な内容検討にはいつていきたい。赤色救援会運動においては「人民の軍隊一人民」である。アーティストの暫時的・普遍的な任務を第一とする）革命的・自発的」としていた訳であるが、これが如何に現実離れしており、空想的であったことか。根本的な誤まりを明かすことから始めよう。誤まりの第一は、本来「人民の軍」ではなくアーティストを代表とする（プロレタリアアーティストの組織形態及びその実踐的・政治的にはかなりあるが、もともと非政治的といえる種のものを支持したことによつて、自らの政治を一貫していまいにしからぬのであった。実踐的には、そのことが口先きではなかったのであった。実踐的には、そのことが口先きではなくさせられたのではなく、「一握りのゲリラ」という

政治的・組織形態及びその実踐的・政治的にはかなりあるが、もともと非政治的といえる種のものを支持したことによつて、自らの政治を一貫していまいにしからぬのであった。実踐的には、そのことが口先きではなくさせられたのではなく、「一握りのゲリラ」という

争に対する支援の運動を一切組めなかつたこと、沖縄の再編期（これは国际反革命の一つの主導軸である日本反革命同盟の再編の一環であるが）にあつて、政治論争を組織し、救援戦線を結束させるという方向すら問題にされなかつたこと、わが国において一つの大好きな政治焦點を形成していた三里塚斗争、就中昨年の九・一六斗争にも何ら対応しえなかつたなどの致命的な限外として露呈している。これはのり移りや卑に支援対象を広げようというようなりな確認で兎版できる問題ではない。政治路線に関する根本問題である。誤まりの第二は、「連合赤軍十一握りのゲリラ」と「赤色救援会」という形で戦線を二つに分離し、「人民の軍隊一人民」という宣伝でもあるが、戦力戦であるかの如きイメージをつくりあげてしまつたことである。戦斗と宣伝・工作活動は一体でなければならず、これは死の政治として体現されねばならない。二つに分離し、「人民の軍隊一人民」という型のあってはめないものである。戦斗と宣伝・工作活動は一体でなければならない。二つに分離し、「人民の軍隊一人民」という型の構築も大衆の部分に依拠する事によつてのみ可能なものであり、「人民の軍隊一人民」という型のあってはめない。この誤りは「赤軍・PFLP・世界戦争宣言」の上院運動に最もよく現われている。この運動の成果は組織的・組織力としてではなくど何も結実させず、分散的に革命兵士を生みだしてしまつて、赤色救援会もしくは戦線の大膽な再編に向け、た任務が明確に定められるべきである。第三の問題は、これは誤まりとはいえないが、全く大元集約されるとと思うが、これから守かれる我々の今後の方針だつたことである。それは綱領の中で作風の問題を語ろうとしても、意識的に一つの領域として扱える事ができなかつたことである。根本的な問題は以上の三点に對する事によつて打ちきたえてゆくこと、今まで高め、組織内民主主義（民主集中制）を貫徹し、人民に奉仕しよう。

この点に我々の再生への道は自己解体からのみ可能である。しかしながら冒頭に述べた我々の歴史的地平がふき、確めて無責任なものとなる。武装し、團結する事、これを助けることは難解にすばらしいことである。それ故にその中味が曉れるのであり、我々は冒頭から述べてきた誤りを根本的に治りようとする事と同時に山い

ものの中にもいくつかの新しい生かされるべき内容を発見する事ができる。それを「人民の早隊」・「人民の团结」

・「戦闘・弾圧・救援」の受動性を排し、「戦闘・工作」・「工作・生産」の一体化による自力更生を、口「合法」

・「非合法」の「あさ性（観念性）」を排し、「公然」・「公然」の一体化による、より大胆（な宣伝）より確実な工作を

、「」の行動領にそくして言うならば、一は政治革命と社会・文化革命の一体化を大きな前提として、労働者階級との結合とこれにともなう整風をよびかけたものであるが、口は大胆な大衆の決起をよびかけたものであるが、我々はこれを政治を獲得し、路線を根底的に変革する事によつて生かさなければならぬ。

最後に赤色救援会は今後もあり続けねばならないし、現在的には対派敵対に純化されるべきものでもない。プロレタリアートの利益を代表する眞の統一効建設に向

自らを再編し、救援取締を融合していく重要な任務をつつている。

二、当面の情勢と任務

連合赤軍の敗北以降、わが赤色救援会の運動も、困難な退却戦を強いられてきた。結束した革命的・指導的核をもたないこの退却戦は、混乱・がかい・動搖が波及し、停滞的氣分が一つの特徴となつてゐた。（例え口先での勇ましさがいくつか主張されていたとしても）この様な困難な状態とその下での格闘は当分避けられないとしても、今夏の諸経験は我々に新たを昂揚・その成熟にしても、今夏の諸経験は我々に新たを昂揚・その成熟にはかなりの度納の月日を要すると思われるが、しかしかなりの広さと深さを持つた・その様な昂揚のきさしを見せてゐる。その基調をなしているのは、第一に言うまでもなくベトナムを中心とした国際的諸状勢であり、第二に、「八・二五会議」の形成と登場であり、第三に相模原闘争の急速な大衆的發展であり、第四に釜ヶ崎の下層労働者の鬱いを一基軸とする戦闘的労働運動の再建であり、第五に在日朝鮮人及び戦闘内閣結成と流動（無論これは国際的な運動の一環として把えられるべきである。）および部落解放運動の發展であり、第六に救援機関再編の動きである。

我々はこの様な動きを急に攻勢への成熟と評価する事はできないし（この現実から今すぐ全人民に突撃をよびかけるのは誤りである）、又しやにむに攻勢へと成熟させる事もできない。（この現実からも客觀状勢をとびこえた主觀主義的で虚偽運起は誤りである。）又、この様なきさしがあるからといって、過去の経験と敗北の総括を放棄して当面の運動に埋没していく事はできない。しかし我々にとつて、この現在の運動に力を注ぎ、これに参加し、その發展に力を尽くす事は当然の義務であると考える。否、それ以上に、現在その様なきさしをしつかりと把え、その強力な發展に力を注ぐ事は、今までぜひ共要求される事である。大衆的活力を育て、そ

三、我々の論争について

赤色救援会におけるこの間の論争は鮮明に二つの傾向に分かれている。根本的な誤りを分析し、路線の転換を成しきろうといふ主張と旧来の路線をそつくりそのままに留めている。しかし、この鮮明な二分野はすつかり論争がつくされた後に鮮明になつたものではないが故に、一度論争内容の到底はどと論争方法を明確にした上で、再度論争される必要があるようと思われる。

連合赤軍の敗北は何に起因していたのか。それは指導の領域とか作風の領域等といふ個別の領域に大きな欠陥があつたからだらうか。否、それもあらうが、たしかにこの重大な敗北は全的破壊であり、思想・路線・組織・作風・機体の敗北である。従つて旧米の思想・路線・組織・作風の分野を、マルクス・レーニン主義の原則にたち返り、これを確立して行く方向で開始されるべきであろうが、救援会内の多くの諸君は全的破壊を言葉の上では認めながらも、旧来の路線にしがみつくといふ主体的には矛盾し、論争の場面においては、問題をほかす動きをしてゐる。更にわるい事では路線と作風の問題をきり離して論じる傾向が生まれてきている。

我々はこの現実（人民大衆とそれをとりまく諸状況）から徹底して学ぶ中で早急にそして確実に克服する必要がある。その意味で確実な救援活動をやり、かつ論争を行ふ事は最も原則的であると考へる。しかし、（救援活動に純化されるべきであるとの主張の根拠もこれがある。即ち、系統的に実する様に実践を整理する事ができるし、これを整理する事が一はん近道の様に思われる。）さて赤色救援会の現在王張されている争の一つに「救援活動の粹を広げよう。」との意見がある。こういつたの敗北以後、特に七・一五まで「連合赤軍の総括もできていないのに安易に実践を提起すべきではない」という主張がて、一五の基調報告にもちこまれ、この基調がそれが以降の論争を不毛なものにしている事実は児のがせない。

さて赤色救援会の現在王張されている争の一つに「救援活動の粹を広げよう。」との意見がある。こういつた主張は旧来の我々の実践内容から見れば一步前進であるが、畢竟の争は疑いない。しかし残念な事にこの主張の大半がのり移り的に使われてゐる。「救援とは何ぞや」からの把えは疑いない。しかし残念な事にこの主張の大半がのり返しがないからである。特に「七・一五基調報告」と合わせて考えると、それは全くののり移りの主張となつて

それをくみとる事は、今日の時期には特殊に重要な事である。そしてそこの中で我々自身を実践的に訓練し、検証し、さ

たえあげて行く事が追求されねばならない。

しまう。何故なら「革命戦争派を支持し、支援し、防衛する。」といふ旧来の路線そのままの路線提起の後に、「救援の枠を広げよう」といつても、その理論的根拠は必然性は全く明きらかではなく、唯現実の要請からなし崩し的に變つてきているからにすぎないからである。

四、支援委運動について（大・ボサツ破防法裁判

争）

今年の三月二六日、支援委員会として組織的に発足して以来、赤色救援会運動の一環として公判対策と被告の政治主張を保障する事に主力を傾けてきた。我々は今、この事を持続させつつ、ひやくを要求されている。それは反破防法の大衆運動の核となる事であり、これによつて分散している反破防法の運動を結束させる事である。その為には我々自身が政治をかくとしなければならないが、それは敵の弾圧体系の分析と味方の团结か、

らはじめなければならない。今や敵の弾圧体系は各國ごとに特殊な形で形成されているばかりでなく、むしろこの特殊性をも規定する国际的な有機的な構造になつてゐる。ブルジョア国家権力は反革命といふ一点で結束し、

世界的な支配の構造——弾圧体系を形成してゐるのである。次回公判は十二月四日午後一時からです。

とし、個別の破防法運動を結合して行かねばならない。

公判の報告

起訴状ろう訛・冒頭陳述とおもつて承取明りに入つてゐるが、なにせ判事の訴訟指揮権の乱用は目に余るものがあり、検事側と一体となつた破防法の早馬実行化の意図が露骨である。そこで全証者に訴えたい。公判の傍聴に敵の弾圧をかんししよう。

次回公判は十二月四日午後一時からです。

於・東京地裁五〇三号。

☆アピール

東京拘置所内における非公開出獄等間を阻止しよう！

☆争美経過

M作戦被告の高田英世同志の証人尋問に際して、弁護人が延滞指揮部、森。板東の両名を申請したのに對し、検察官は両者は不必要である事向時に育と幹夫を申請し、結局証人として森、青との両人が呼ばれ、十月二日に前橋、宿所の中で尋問が行なわれる事になり、我々は即刻これに対する抗議のビラまきを開始し、「秘密裁判阻止討論集会」を開催した。その様な中で十月二日直前になつて敵は場所を東京拘置所に変更し、これを強行せんとした。我々はこれに対しても即刻、担当の浦和地方裁判所に抗議のデモをかけ、裁判長の齊藤昭矩に抗議文を手渡した。これに呼応し、高田同志は「抗議申立」を行つたが、当日東京拘置所内でこれが却下になつた。彼はすぐさま判事の「キ遊申立」を行なつたがこれも却下。これに対する彼の即時逤告によつて実質審理は先にのはさ

れているが、それは共同共謀正犯といふデシチ上げである。かつて大連事件は、労働者宮下太吉の天皇暴殺の企図と、官野すが等三名の共同謀議という内容のものでしかなかつたが、幸徳秋水ら多くの社会主義者をこの世から奪りさつた。それは政治政府がかつてはその陰謀とあらゆる会議や雑談を結びつけたものだつた。彼の場合も正にこれと同じ内容であり、何の確証もないまま、彼

が赤軍派に屬しているというだけで、共同共謀正犯とされている。実質的に非合法の「赤軍辨」とでも表現すべきものができあがつてゐる。そして既に一年四ヶ月にも及ぶ不當に拘留されている訳であるが、何故候そなうに判事は、彼に対してかくも不當に長期の拘留を行うのか？それは公平な裁判の進行の為か？そうではない。彼から政治活動を奪うという政治目的の為である。非合法の予防拘束である。しかも敵権力は、その様な困難な状態にある彼に対しても、何と裁判（延滞亦專指専門、株・板東の両名が証人となる）を、非公開（その理由は何ら大衆的に明きらかにされていない）にするという二重三重の弾圧をかけて來てゐる。この様な弾圧は我々團から人民総体への敵の公然たるちよう戦であり、國から組織にたいてるにくしみの集中攻撃であり、人民と闘う組織を分断する策動である。この間の裁判における敵権力の狂暴な弾圧は、欠席裁判。欠席判決、被告・弁護人の发言権。防禦権のはく奪、公安権力の狂暴な法でい介入、傍聴人の身体搜查、実質的傍聴権のはく奪、全面的監視体制、日常茶はん事の機動隊暴行等として行なわれ、弁護人等の思想性。政治性が暴力的に圧殺され、階級抑壓判とはもとより階級裁判であるが、近年とみに被告・辯護人の身体搜查、実質的傍聴権のはく奪、全面的監視体制、日常茶はん事の機動隊暴行等として行なわれ、庄の手段として一層露骨になつてきてゐる。更には、昨年十二月一日より強行実施された差入れ制限。戦具使用、そして悪名高い「保安処分」懲罰罪を中心とした法の改悪や破防法により歸る人民への肉体的・精神的全面抹殺を企んでゐるのです。昨年の差入れ制限。戦具の使用の決定と時を同じくして強行されんとした今回の如き松田久戰士に対する初審裁判は多くの人民の決心によつてもろくも粉碎されたし、岡本公三戰士の軍事裁判は、全世界の人民が監視した。又、レジス・ドブレ戦士やアンジェラ・デービス戦士は、世界の人民の結束した力によつて既に導き出されてゐる。我々はこの輝かしい成果をふまえ、敵の反革命の陰謀を粉碎し、敵機械の再編強化をおし進めよう。

たわけであるが、当然これも却下されて再び東京拘置所内での改判が強行されることが予想される。

スローガン

一、東京拘置所内での非公開・出獄尋問を阻止しよう！

二、審査裁判化を阻止しよう！

三、監獄法廃止！

四、改刑法・保安処分初碎！

五、刑法の改悪阻止！

六、差し入れ制限・収容の使用を許さない！

七、ファツショのあらしに抗し、救援戦線の再編・強化を！

※

※懲罰に抗議する！

松田同志は、房内の手紙類の保管を制限されたことに對してハンストをもつて抗議した。これに対する敵権刀の報復（みせしめ）として、九月二十八日より一ヶ月の罰房入りが続いている。更に彼はハンストの過程で黙埋やりにわけのわからない注射をされ、収容（身体の自由を全く奪いさるもの）を併用されている。他に同様のケースは堀崎惣三等にもなされている。

長期の不当拘留者を即時保釈せよ！

※六。一七明治公園機動隊せん激戦（被告・酒井隆樹（同志）の公判に結果せよ）

六。一七の第一回公判が十月十九日（午前十時）に設

定されている。六。一七というのは昨年の六月十七日に

沖縄斗争の始発の中で明治公園において文字通り反革命

機動隊をせん滅せんがために人民の手づくりの爆弾をお

みまいしたといふはらしい半事であつた。これに対す

る敵権力の報復はすさまじかつた。M作戦の被告を中心

とした赤軍派のメンバーを多數別件逮捕し擴張的取り調

べを行う一方例によつてマスコミを煽動員しての反共宣

伝、分断策効にやつととなつていた。そのような中で不

子M作戦被告の酒井同志が邊合赤軍のメンバーの自供に

もとづいて起訴されているのだが、彼は米子の件との併

合を要求（これは既に決定されている）し、裁判を一本化

化し、集中し、戦の態勢を固めている。更に、彼を支援する友人たちも既に結集しつつあるし、している。更に多くの人民諸君が結集されることを！

※下獄する同志たち※

◎新谷富男同志（M作戦）八年

既に下獄しているが、まだ東京拘置所にいるので会えるし、差し入れもできる。

◎加藤和博同志（M作戦）既に下獄している。

◎花園紀男同志 四年五ヶ月 上告の予定。

◎玉振佐代子（M作戦）尚裁却下。

※公判日程表※

十月十六日 奥山修一（連合赤軍）午前十時

前橋地裁

十九日 酒井隆樹（六・一七明治公園・M作戦）午前十時

東京地裁

十一月 六日 前沢虎哉（連合赤軍）午後一時

前橋地裁

十二月 四日 塩見孝也（大ボサツ・防法）午後一時

東京地裁

十四。十五日 大ボサツ斗争 午前十時 東京地裁

十五日、杯 よしてる（M作戦）結審 東京地裁

二十日 前沢虎哉 午前十時 東京地裁

二十七日、前沢虎哉 午前十時 東京地裁

二十八日 背済修一 午前十時 東京地裁

十一日 前沢虎哉 午前十時 前橋地裁

午前十時 前橋地裁

追記、ハイジャック裁判（塩見・高原・川島・上原）

は、次回十月二十四日にあります。四同志の保釈金カンパを集中せよ！

以上

したがつて、未決通算三百五十日との判決が下る。

高原同志の公開質問とそれに対する赤軍派都委員会の解答

以下は、公開質問の全文である。

〔一〕赤軍派「東京都委員会」は、「再生に因りて」第三号において「連合赤軍公判への我々の態度」を明らかにしている。これに関する、以下批判し、公開質問する。責任ある回答を行なわれたい。

三、「再生に向けて」第三号を引用する。「6、かかる基本的立場の上で、連合赤軍指導部の裁判に対する我々の態度は次のとおりである。」ます我々は、敵権力による裁判執行を撲滅し、死刑などの一切の報復に反対する等、連合赤軍指導部を敵権力から擁護しつつ、彼ら自身の生きた政治主張を保証し、彼らとの論争を広く大衆的に組織するだろう。そして、彼らに対しては、「麻雀」された敵同志たち、その遺族、さらに革命運動とプロレタリア人民、全てに対する自己批判作業を賛成し、又今日までの自己の斗いの歴史を革命運動全体の遺産とすべく総括。

裁判化しそれをもつて、再び、階級戦線に復帰するよう要求するであろう。

〔二〕質問する。赤軍派「東京都委員会」は、人民の革命運動を指導する党派として、連合赤軍指導部一株・永田一味に對する人民の革命裁判を組織する気はないのか。連合赤軍指導部一株・永田一味の罪は、革命一人民に裁かれなくとも、反革命一ブルジョア権力にとらわれ、裁かることによつて消えさると考へているのか。これに答へられたい。私は、連合赤軍指導部一株。永田一味には「生きた政治主張を保証するのに」(注一)された同志たちを更に虐殺するつもりなのか。これに答へられたい。私は、連合赤軍におけるリンチ殺人は、指導部一株・永田一味が内部矛盾一党内斗争を敵対矛盾の方法一暴力でもつて解決し、内部矛盾一党内斗争をあくまで内部矛盾の方針一説得でもつて解決しようとしていた同志たちをリンチし、虐殺したものであると考へている。たとへたならば、連合赤軍指導部一株・永田一味にだけなく、虐殺された同志たちも「生きた政治主張を保証」するにはどうすべきか。彼らから「生きた政治主張」を略奪し彼らをリンチし虐殺した連合赤軍指導部一株・永田一味を断罪、糾弾することに

よつてのみ可能である。そして、このことを抜きにして連合赤軍指導部一株・永田一味は「生きた政治主張を保証」することは、彼らに加担、庇護して、虐殺された同志たちを更にリンチし虐殺し、その「生きた政治主張」を更に略奪しつづけることを意味する。

〔三〕ブルジョア権力が、反革命戦争の一環として株・永田一味への反革命裁判を組織するのに對して、裁判を斗争を斗う形で革命戦争の一環としての人民の革命裁判を組織せよ。その中で、ブルジョア権力が反革命分子である株・永田一味を革命家の如く取り扱つて革命を押圧するのに對して、株・永田一味が革命家でなく反革命分子であることを暴露し裁判権を人民に奪還し、反革命分子一株・永田一味への裁判権を人民から剥奪していることを暴露し裁判権を人民に渡し、反革命分子一株・永田一味へ行使せよ。ブルジョア権力が反革命分子一株・永田一味を反革命裁判にふさわしく犯行の肉体的探察で減らすに拘して、革命裁判にふさわしく思想的・人間的改造で株・永田一味を裁け。そして、この人民の革命裁判の中で、赤軍派は人民に對して反革命分子一株・永田一味を自らが遺族として、または他の遺族の誰かが株・永田一味を同様にリンチし虐殺し復しゆうせんとするところが遺族として、それを阻止できないはずである。しかし、人民の革命運動を指導する党派であるなら阻止しなくてはならないのである。

〔四〕以上、赤軍派の全同志に公開し、公開で回答されたい。

〔五〕質問する。赤軍派「東京都委員会」は、連合赤軍指導部一株。永田一味には「生きた政治主張を保証するのに」(注一)された同志たちを更に虐殺するつもりなのか。これに答へられたい。私は、連合赤軍におけるリンチ殺人は、指導部一株・永田一味が内部矛盾一党内斗争を敵対矛盾の方法一暴力でもつて解決し、内部矛盾一党内斗争をあくまで内部矛盾の方針一説得でもつて解決しようとしていた同志たちをリンチし、虐殺したものであると考へている。たとへたならば、連合赤軍指導部一株・永田一味にだけなく、虐殺された同志たちも「生きた政治主張を保証」するにはどうすべきか。彼らから「生きた政治主張」を略奪し彼らをリンチし虐殺した連合赤軍指導部一株・永田一味を断罪、糾弾することに

以下は、公開質問の全文である。

〔一〕赤軍派「東京都委員会」は、「再生に向けて」第三号において「連合赤軍公判への我々の態度」を明らかにしている。これに関する、以下批判し、公開質問する。責任ある回答を行なわれたい。

三、「再生に向けて」第三号を引用する。「6、かかる基本的立場の上で、連合赤軍指導部の裁判に対する我々の態度は次のとおりである。」ます我々は、敵権力による裁判執行を撲滅し、死刑などの一切の報復に反対する等、連合赤軍指導部を敵権力から擁護しつつ、彼ら自身の生きた政治主張を保証し、彼らとの論争を広く大衆的に組織するだろう。そして、彼らに対しては、「麻雀」された敵同志たち、その遺族、さらに革命運動とプロレタリア人民、全てに対する自己批判作業を賛成し、又今日までの自己の斗いの歴史を革命運動全体の遺産とすべく総括。

裁判化しそれをもつて、再び、階級戦線に復帰するよう要求するであろう。

〔二〕質問する。赤軍派「東京都委員会」は、人民の革命運動を指導する党派として、連合赤軍指導部一株・永田一味に對する人民の革命裁判を組織する気はないのか。連合赤軍指導部一株・永田一味の罪は、革命一人民に裁かれなくとも、反革命一ブルジョア権力にとらわれ、裁かることによつて消えさると考へているのか。これに答へられたい。私は、連合赤軍指導部一株。永田一味には「生きた政治主張を保証するのに」(注一)された同志たちを更に虐殺するつもりなのか。これに答へられたい。私は、連合赤軍におけるリンチ殺人は、指導部一株・永田一味が内部矛盾一党内斗争を敵対矛盾の方法一暴力でもつて解決し、内部矛盾一党内斗争をあくまで内部矛盾の方針一説得でもつて解決しようとしていた同志たちをリンチし、虐殺したものであると考へている。たとへたならば、連合赤軍指導部一株・永田一味にだけなく、虐殺された同志たちも「生きた政治主張を保証」するにはどうすべきか。彼らから「生きた政治主張」を略奪し彼らをリンチし虐殺した連合赤軍指導部一株・永田一味を断罪、糾弾することに

よつてのみ可能である。そして、このことを抜きにして連合赤軍指導部一株・永田一味は「生きた政治主張を保証」することは、彼らに加担、庇護して、虐殺された同志たちを更にリンチし虐殺し、その「生きた政治主張」を更に略奪しつづけることを意味する。

〔三〕ブルジョア権力が、反革命戦争の一環として株・永田一味への反革命裁判を組織するのに對して、裁判を斗争を斗う形で革命戦争の一環としての人民の革命裁判を組織せよ。その中で、ブルジョア権力が反革命分子である株・永田一味を革命家の如く取り扱つて革命を押圧するのに對して、株・永田一味が革命家でなく反革命分子であることを暴露し裁判権を人民に奪還し、反革命分子一株・永田一味への裁判権を人民から剥奪していることを暴露し裁判権を人民に渡し、反革命分子一株・永田一味へ行使せよ。ブルジョア権力が反革命分子一株・永田一味を反革命裁判にふさわしく犯行の肉体的探察で減らすに拘して、革命裁判にふさわしく思想的・人間的改造で株・永田一味を裁け。そして、この人民の革命裁判の中で、赤軍派は人民に對して反革命分子一株・永田一味を自らが遺族として、または他の遺族の誰かが株・永田一味を同様にリンチし虐殺し復しゆうせんすると、それを阻止できないはずである。しかし、人民の革命運動を指導する党派であるなら阻止しなくてはならないのである。

〔四〕以上、赤軍派の全同志に公開し、公開で回答されたい。

〔五〕質問する。赤軍派「東京都委員会」は、連合赤軍指導部一株。永田一味には「生きた政治主張を保証するのに」(注一)された同志たちを更に虐殺するつもりなのか。これに答へられたい。私は、連合赤軍におけるリンチ殺人は、指導部一株・永田一味が内部矛盾一党内斗争を敵対矛盾の方法一暴力でもつて解決し、内部矛盾一党内斗争をあくまで内部矛盾の方針一説得でもつて解決しようとしていた同志たちをリンチし、虐殺したものであると考へている。たとへたならば、連合赤軍指導部一株・永田一味にだけなく、虐殺された同志たちも「生きた政治主張を保証」するにはどうすべきか。彼らから「生きた政治主張」を略奪し彼らをリンチし虐殺した連合赤軍指導部一株・永田一味を断罪、糾弾することに

よつてのみ可能である。そして、このことを抜きにして連合赤軍指導部一株・永田一味は「生きた政治主張を保証」することは、彼らに加担、庇護して、虐殺された同志たちを更にリンチし虐殺し、その「生きた政治主張」を更に略奪しつづけることを意味する。

〔三〕ブルジョア権力が、反革命戦争の一環として株・永田一味への反革命裁判を組織するのに對して、裁判を斗争を斗う形で革命戦争の一環としての人民の革命裁判を組織せよ。その中で、ブルジョア権力が反革命分子である株・永田一味を革命家の如く取り扱つて革命を押圧するのに對して、株・永田一味が革命家でなく反革命分子であることを暴露し裁判権を人民に奪還し、反革命分子一株・永田一味への裁判権を人民から剥奪していることを暴露し裁判権を人民に渡し、反革命分子一株・永田一味へ行使せよ。ブルジョア権力が反革命分子一株・永田一味を反革命裁判にふさわしく犯行の肉体的探察で減らすに拘して、革命裁判にふさわしく思想的・人間的改造で株・永田一味を裁け。そして、この人民の革命裁判の中で、赤軍派は人民に對して反革命分子一株・永田一味を自らが遺族として、または他の遺族の誰かが株・永田一味を同様にリンチし虐殺し復しゆうせんすると、それを阻止できないはずである。しかし、人民の革命運動を指導する党派であるなら阻止しなくてはならないのである。

〔四〕以上、赤軍派の全同志に公開し、公開で回答されたい。

〔五〕質問する。赤軍派「東京都委員会」は、連合赤軍指導部一株。永田一味には「生きた政治主張を保証するのに」(注一)された同志たちを更に虐殺するつもりなのか。これに答へられたい。私は、連合赤軍におけるリンチ殺人は、指導部一株・永田一味が内部矛盾一党内斗争を敵対矛盾の方法一暴力でもつて解決し、内部矛盾一党内斗争をあくまで内部矛盾の方針一説得でもつて解決しようとしていた同志たちをリンチし、虐殺したものであると考へている。たとへたならば、連合赤軍指導部一株・永田一味にだけなく、虐殺された同志たちも「生きた政治主張を保証」するにはどうすべきか。彼らから「生きた政治主張」を略奪し彼らをリンチし虐殺した連合赤軍指導部一株・永田一味を断罪、糾弾することに

よつてのみ可能である。そして、このことを抜きにして連合赤軍指導部一株・永田一味は「生きた政治主張を保証」することは、彼らに加担、庇護して、虐殺された同志たちを更にリンチし虐殺し、その「生きた政治主張」を更に略奪しつづけることを意味する。

純化されていった赤軍派の思想。戦術原則・組織計画と無関係な地平でいわゆる「総括」・「死刑」をとらえようとする傾向、すなむち、「單人になりきれていない、隊内の規律を乱した、密告の恐れがある等々と判断された者はいわゆる「総括」・「死刑」に付するとされたいた事が赤軍派の思想。戦術原則・組織計画からして必然あつたという事から目をそむける傾向に断固反対する。

総路線と切りはなして單に「同志を殺したから反革命」とする感情論とは断固斗う。單に「同志を殺したから反革命」とする諸君は、次の質問に答える義務がある。イ、浅間山荘事件を反革命集団と援助の対決ないしは、両者によつて演じられた張芝居とはするのか。ロ、多くの殺された同志たちは、殺した同志でもあるが、彼らをいかに評価するのか。連亦の同志たちの多くが、いわゆる「総括」・「死刑」に積極的にせよ消極的にせよ同意していたという事実をいかに説明するのか。

三、いわゆる「総括」・「死刑」を、革命左派との連合や統一や、浅間山荘での敗北とともに、赤軍派の思想・技術原則・組織計画の全般にわたる破壊宣言としてとらえる赤軍派都委員会は、総路線の誤まりに気がつかず、同盟と革命運動に多大の損失をもたらした連亦指導部幹部の政治責任をいさかでもあいまいにせんとする傾向と斗う。だけでなしに、又、同時に赤軍派結成以降の全指導部の政治責任を問うべきであると考える。

四、赤軍派都委員会は、以上の観点から、赤軍派指導部の処分は完大会によつてのみなされうると考える。

五、完大会で処分できるのは、当然のこととして、赤軍派同監貞だけである。革命左派に対する赤軍派都委員会の態度は次の如くである。革命左派に対して、我々は、真陥な総括作業と又、左翼空論主義・軍事力学主義・テロリズムの克服を要求する。革命左派は、政治第一のそうち矢を一部の反対分子のせいにするのではなく、革命左派結成と不可分の特徴として認めるべきである。そして、六九年段階で何故政治第一を否定し軍事力学主義に転落していくのかを解説すべきである。こうした作業を最後まで貫徹していくば、対米従属論・反米愛國路線の誤慮して、彼らとの初覚結成を御飯座にする事は勿論、統一戦線も基本的には解消する。

六、いわゆる「人民の革命裁判」なる主張は現段階では、空論であるのみならず有害でさえある。なぜ空論かといえは、「人民の革命裁判」はブルジョア階級独裁権力の打倒とブルタリア階級独裁権力の樹立によつてのみ可能となるものだからである。大言壮語は赤軍派の悪い伝統である。なぜ有害でさえあるというと、この主張

が個人主義的感情。小ブルヒューマニズムの表現、そうした感情・傾向への屈服の表現であつて、連亦指導部幹部の個人的特殊的欠点を肥大化することによつて、いわゆる「総括」・「死刑」を総路線の必然的帰結として解明する観点をあいまい化する傾向の一つの根ねだからである。

—10—

七、「虐殺された同志たちに、生きた政治王族を保証する」などというものは、魔法使いにしかできない事である。連亦指導部幹部等を断罪・糾弾すれば「虐殺された同志たちに、生きた政治王族を保証する」事になるなどという主張は、個人主義的氣休めの爲の報復を正当化する言にすぎない。多くの同志たちの死を無駄にしない為には、いわゆる「総括」・「死刑」として現象し（そして七・六事件、六十九年秋前線の万針の坐折、國際根拠地論の破壊、M作戦による多大の損失、革命左派との連合統一、浅間山荘での敗北等々に塊象した）亦軍派の根底的誤まりの確証と、亦軍派を生みだした原因と事件の解明。兎服こそ必要なのである。こうした路線転換を徹底化たらしめる爲にのみ断罪・糾弾・廃止はなされねはならない。内部矛盾の解決の方法の誤まりを原則一般化見地から批判したところで何も解決されはしないし、そうした批判の上に立つてなされる連亦指導部に対する断罪・糾弾は、いわゆる「総括」・「死刑」を生みだした総路線を不間にする傾向を助長するので徹底的に批判されなければならない。

八、同志高原は、もし同監貞としての立場に徹し、同志遠山の同監貞としての立場を尊重し、彼女の死を決して無駄にすまいと決意しているならば、同盟再建にとつて有害な「人民の革命裁判」なる方針をもちだすべきではないだろう。我々は、革命左派との連合なりが

九、赤軍派都委員会は、連亦指導部をふくむ被告・被告家族・道族を、できうる限り、同盟のまわりに結束し、團結をかちとり、敵権力に対する反撃力を強化すべく努力する。その為には、被告家族・道族の王族とともに、被告の王族をも保証しなければならない。そして、何よりも、ます彼らを説得し团結せしめケン引し侍る総括と統一亦軍指導部一株・永田一味に加担し、虐殺）

（注二、以下の文を挿入する、）「生きた政治主張を証保証」しなくてはならない。殺された同志たちに

がつてきた。だが、レーニンの核心は充分理解されていなかった。レトニンが「何をなすべきか」でのべている

のは、「プロレタリアの意識を工場内の問題にせばめず

に社会生活のあらゆる領域を認識させ（国家をめぐる諸

階級の相互関係の認識）、二、この認識の下に諸階級をブ

リ等階級の政治的経済的問題の先頭に立ちかれらを指

し自己を支配階級へと打ち鍛えること（これが全人民

政治斗争）、三、このプロレタリアートの斗いの前衛

としての武装蜂起の党を提起したのであつた。すなわち、

全人民的政治斗争とは権力問題であり全面的政治暴略は

起する権力問題に高められなければならない。

ところが、新左翼革命派の政治斗争はブルジョアジー

起した政策がよびおこす人民の自然発生的斗争に完

て誤詮していた。「安保」と名がつけば政治斗争でい

る「政治斗争」を次々と斗つていれば対とプロレタ

リエ目的意識性がかちとられるわけではない。党派が

政治斗争の中で意識化した「階級」は機動隊（テモ隊

テモ隊と群集）を一括して漠然と「プロレタリアート」

（國家権力（機動隊）→プロレタリアート（テモ隊と

階級））という階級認識であり裏返しの経営主義である。

社会関係としての階級）ではなかつた。政治斗争の

政治斗争は経済斗争を切り下してではなく経済斗争を政治斗争として戦つた。だが、真の

三里塚斗争が始まつた時、中核が農民の土地防

衛に押詮し経済主義に陥つたのに對しブンドは一

度も「なんぞやつたか」が党派の優劣を決める基準となつた。

政治斗争は経済斗争を切り下してではなく経済斗争を政治斗争として戦つた。だが、真の

農民の土地防衛に導かれた戦いとして。

どうやら、党派の社共批判も政治的指導性も権力問題によつてではなく斗争形態のエスカレートに求められ「ど

うかがつて、われわれ革命派は極論すればとにかく諸

経済主義批判としてのテロリズムの傾向、が存在する。

第一回、「綱領上は権力問題の軍事への一面化である」

党派の指導性を斗争形態のエスカレートによつて示そうとする傾向は赤軍派であつて極限にまで純化された。

十一月銃火器による機動隊の壊滅。〇〇名の尖撃隊に

の党派を除いては一問題を根本的に提起しようとせず、敗北を勝利といいくるめ何くわぬ顔をして安保決戦をやりすだし、七十年代に漠然とのり移りだした。

つねに、最先頭で斗つて来たが故に最も先と斗争の形

は、安保決戦に前段階武装蜂起を貫徹し三プロツク階級

斗争を单一の世外革命戦争を統合し、大衆斗争を権力斗争（ブルジョア独裁かプロレタリア独裁かがリアルに用

われる段階）に高めあげ、武装蜂起の党、世外党建設の第一歩を開始しようとした。そして、蜂起の軍隊建設を軸に蜂起の党へ向けた党的革命をなしとげようとした。

この赤軍派の理論と実践は、肯定回と否定傾向とが不可分にもつれあつてゐる。

「前段階武装蜂起を貫徹する」とは何を意味していたのが。単に「佐藤訪米阻止」が目的でなく、「ブルジョ

ア権力打倒 プロレタリア権力樹立」の一環で党的結果をかちとり、政治過程論の党を権力問題の党へと転換さ

せる事だつたのである。われわれは自然発生的革命路線の根本的転換をかちとらうとした。綱領上における権力問題の提起。組織上における軍事を組織する武装蜂起の党。戰術上における道程としの戰術から計画としての戰術の根本的転換である。「階級斗争が内戦の質をもつてくる時、戰術の実現とは他ならぬ武装蜂起の実現であり、それを個々の局面の戦闘においては実現しないものである。従来のわれわれはもつとリアルに語る。「政治過程の焦点、

大衆斗争の延長上」を設定する思考とは無縁である。「われわれはこれまでに「プロレタリア革命政府の建立」のスローガンを公然と打ち消さなければならない。そしてプロレタリア革命政府の「最大限」最小限

は安保決戦が終り当分は蜂起が問題にならないと感じたの計画としての戰術」と認められなければならない。

（ブンド）「党的革命・革命の軍隊」（P.五、六）連合ダントは安保決戦が終り当分は蜂起が問題にならないと感じた

の戦術への転換である。「階級斗争が内戦の質をもつてくる時、戰術の実現とは他ならぬ武装蜂起の実現であり、それを個々の局面の戦闘においては実現しないものである。

大衆斗争の延長上」を設定する思考とは無縁である。「われわれはこれまでに「プロレタリア革命政府の建立」のスローガンを公然と打ち消さなければならない。そしてプロレタリア革命政府の「最大限」最小限

は、たにもかかわらず、われわれは見事に敗北した。何故か。古い政治の世界の延長上に、否それを極限にまでにつめてある。

よる権力中枢の占拠。これ以外に安保決戦を勝ちぬける

(1) 大歴史（史的唯物論的領域）／ロシア革命以降の過渡

万法はないようと思われた。しかし、重の変化は實の転

がブロレタリアートの攻防を媒介にのべられ、(2) 中歴史
期世界階級斗争の到達段階を全体的に総括し、(3) 小歴

化をひきおこす。銃火器という斗争形態は既に「安保決

戦」の枠をこえていた。われわれは安保決戦をとことん

倒立」という権力間の政治へ転化した。即ち、政治

過渡論的政治理の極限化はその対物。「権力問題の政治」の攻防を媒介にのべられ、(4) 上で大歴史への転化

へ自然発生的に転化したのだ。だが正に、安保決戦とい

う古い政治の世界から権力間を見つめたこと、ここに

蜂起敗北の根本的原因がある。平たくいえば、「プロレタ

リア權力を実現する具体的な計画をもつて武装蜂起を貫徹

しようとしたのではなく、安保決戦の自然発生的運

動を極限にまで高めあげ「とにかく蜂起をやる、プロレタ

リアートを権力に動員する方法はその後に考える」と

を制約する段階からブルとプロが相互に規制し合ひなが

り、一方的にプロレタリアートに到達しかつそれへの夢みを開始した。(2) その

事によつてフルジヨアジーが一方的にプロレタリアート

蜂起敗北の根本的原因がある。平たくいえば、「プロレタ

リアートに到達しかつそれへの夢みを開始した。(2) その

世界では革命戦争という斗争形態をとつてゐるところが多い。又現代ではブルは国际反革命体制をしき、共同してプロを抑圧しているのでプロには国际反革命体制をしき、共同して益々要求されているというのは事実である。しかしながらといつて、今すぐ三プロック（全世界至るところ）が武装斗争になつて国境をとえなければならぬといふ戦術をだす事にはならない。一方では世界武装プロといふ概念を用意しておいて資本主義批判の次にいきなりあらかじめ用意された世界武装プロを戦術にまで適用しようとしている。世界全体及び多國の権力をめぐる階級の相互関係の分析、その階級的基盤の上にどのような質の斗いが起り、共産主義者がどのようにそれを指導してきたのかという中間項が欠けてゐる点で決定的に誤つてゐる。だからレーニン主義の限界といふのはポーランド進攻を徹底して行なわなかつたからだといふ至少な批判になり、以後の革命運動を全部世界武装プロの立場で一面的に評価している。民族解放斗争も革命戦争といふ斗争形態でのみ評価し、それも後進国といふプロックをえていないから地方的等殊的で、日本人民を革命運動に充分たちあがらせていないでも世界革命戦争をやろうといつてゐる部分（赤軍）が普遍的だといふ事になる。更に中国・朝鮮・ペトナムの革命戦争の根柢を金融過剰資本が恒常的に存在し、そのはけ口を戦争に求めるから革命戦争になるといふ資本主義批判の侧面でのみ評価し客観主義になつてゐる。アジアの共産主義者、人民の主体的斗争の結果として把えていかないのである。何故このような誤りを犯しているのか？ 当時の我々の運動基盤がプロレタリア階級ではなく、社会的生産関係からわりやすい行動できる小ブル学生層であり、又斗争形態が主に街頭ゲバ斗争であつたからである。その為に階級分析を捨しようし武装斗争の戦術という点でのみ革命運動を評価してしまうことになる。

赤軍派は確かに従来の新左翼の革命觀の根本的転換を勝ちとろうとして必死のチヨウヤクを試みた。だがその為には小ブルの革命理論とその階級的基礎を徹底的に批判しつくし清算しない限り必ず敗北するし、事実ここ数年間は確実な確実な敗北の過程であつた。赤軍派は小ブル的な立場から提起した新しい政治内容をプロレタリア階級の立場から意識化し、組織化しなおす事に失敗し連合赤軍の悲劇を導いてしまつたのである。

第一章では赤軍派誕生の意義と限界について日本新左翼の共産主義運動の総括の中からいわば内因として明らかにしてきた。ここでは外因・国际共産主義運動について若干述べておきたい。

第二章、過渡期世界と民族解放。社会主義革命戦争！赤軍誕生の秘密。

資本主義が帝國主義段階に入り、ブルジョアジーは資本主義の発展していない後進国を植民地化し、莫大な過剰利潤をあげ、その一部で労働者上層を貢収し国内プロレタリアを体制内に包括しようとした。ブルジョアジーはにこのようない對応をとらせた理由は、基本的には資本主義の独占資本主義の移行・転化であるが、他方ではプロレタリアの近代プロレタリアートとしての成長・労働組合運動の発展である。即ち一方ではプロレタリアートの斗争を弾圧しつつ他方では一定の妥協によつてプロレタリアート内部にくさびを打ち込み總体として体制内化するという政策を余儀なくされた。ここで資本主義社会の主要な階級矛盾は帝國主義対被抑圧民族との矛盾といふ形に転化した。この時レーニンは「マルクス主義の戦闘を持打ちだしマルクス主義を創造的に発展させたのである。第二インターと第三インターの決定的違いは①帝国主義国内プロレタリアートが祖国の革命的敗北主義の戦略をとるか否か②それと表裏一体のものとして従米のマルクス主義の世界革命一ヨーロッパ革命という常識に対して帝國主義段階への移行とロシア革命の成功によつて世界的階級關係がどのように変つたか、その中で民族解放斗争を世界社会主義革命の中にどのように位置づけるかをめぐる連いであつた。

共産主義者であるならば必ず世界革命の戦略をたてる場合、世界帝國主義体制の矛盾を最も集中して受けてゐる階級に徹底的に依拠し、必ずしもその立場にたたなければならない。勿論その階級の科学的基礎と歴史的弁証法的發展を見て同時にその階級だけでなく全階級關係を把握しなければならない。だがマルクス主義は「社会の科学は必ずしも階級性をもつてゐる」という立場であり、こそが科学を生み出す源なのである。党は必ずしも階級性と科学性を結合しなければならない。しかしレーニンは決して革命はありえない。又大きな観点からみれば階級起したが、その戦略一戦術までは提起できなかつた。即ち階級性はもつていたが科学性は不充分であつた。こ

れは正にロシア革命によつて中国五一・四運動に代表されるように当時の民族解放斗争が民族ブルジョアジーからプロレタリアートのヘゲモニーに転換する過渡期であったからである。

プロレタリア世界革命の時代の民族解放斗争を「民族解放」社会主義革命戦争の戦略・戦術（科学）として正しく解決し、過渡期世界の革命論を一步おし進めたのが毛沢東である。日本革命にとつてインドシナ・中国・朝鮮の民族解放斗争と如何に結合するのかが第一の戦略課題であるからには、毛沢東思想を如何に吸收するかは第一級の政治課題である。何故中國共産党一人民を始めとするアジア人民だけがヨーロッパ・プロレタリアートの敗北・コミニテルンの変質・解体・第二次大戦の逆流を打ち返していくことができたのか。「被抑圧民族に最も矛盾が集中し、いわば帝国主義の弱い壇であつた」というのは中国・アジア革命成功の経済的階級的基礎を語つてゐるにすぎない。問題は共産主義者の実践として検討することである。毛沢東はその持久戦陣型によつて、レーニンが第三インターの結成によつて提起し、中途挫折した世界プロレタリアートの陣営構築の問題を中国内部において解決した。ロシア革命の成功と引き続く内戦の過程は、共産主義者に次の課題の解決を迫つた。ロシアの社会主義建設（工業力の発展、農業の社会主義的改造、分業の発展、上部構造のプロレタリア的転換、統じてプロレタリア国家の社会主義・共産主義への移行の問題）をロシアを世界革命の根拠地とすること。（世界的規模での帝国主義から社会主義への移行の問題）——として一つの問題を如何に解決していくのかという課題である。第三インターは独ソ不可侵条約（戦術的撤退、戦略的前進）の中で遂にその課題を解決する事に失敗した。毛沢東は中国社会において階級分野を基礎とした権力問題をレーニンよりも一步進んで明らかにすることによつてこの課題を解決した。（尚、ソ連にあつて一国と世界の関係に照應するのが、中国にあつては根拠地と未解放地域の関係である。）まず中国社会の矛盾の性質と各階級分野を（半植民地、半封建）（外国帝国主義、資本、大地主対労働者、農民）、つぎに革命の性質（民族民主革命）、原動力及び力を（都市プロレタリア、民族民主革命）と統一戦線を（人民民主主義革命）社会主義革命への水戻す。（民族・民主統一戦線）、最後に斗争形態を。（武装斗争が主軸。それと政治斗争の結合）明らかにし権力問題を解決した。レーニンから毛沢東の権力問題の発展は政治的には統一戦線政策、軍事的には三種の軍隊建設となつて具体的に現われる。

ロシア革命は帝国主義間の戦争が弱小帝国主義ロシアの敗局をひきおこし、ソビエト（統一戦線と兵士の反乱（赤衛軍建設が主に大衆自身のヘゲモニーによつて行な

われた。それをボルシェビキが武装蜂起・プロレタリアと導いたのである。共産主義者が権力問題を意識的主導的に打ち出しプロレタリア人民を不斷にプロレタリアの陣型へと高めちげることを通じてブルジョア独裁を打倒していく側面が不充分であつた。即ち権力奪取（破壊）と権力樹立（建設）が一個二重の過程として進行した革命ではなく、破壊が半ば自然発生的に行なわれた。その後に革命の成功によつて破壊と建設の統一が問われた時に余りに多くの困難をかかえ込み、遂にその課題に答えきれなかつたのは、勞農同盟が革命以前から打ち鍛えられていなかつた烏ニ内戦過程で農民の離反をひきおこした。軍事的には共産主義的軍隊と敵に勝てる軍隊の二者択一の中でツアリヤ時代の特徴を指揮官に登用し、後者の道を選択して行つたのである。中国ではそれに対し統一戦線政策によつて、強固な勞農同盟を持久的に打ちきたえ、かつその政治的基礎の上に戦斗・工作・生産の一体化した軍隊を建設した。ゲリラ戦から運動戦への発展に照應し、児の颶風運動を通じて統一戦線はプロレタリアヘゲモニーの下に根拠地政権として発展し、軍は中央軍・地方軍・民兵といふ三種の軍隊を系統的に整備していつた。しかも中央軍は不断に生産隊・工作隊に転化したし、中央軍の運動戦は人民の海（根拠地政権・民兵）に支えられた遊撃戦略の一環として斗がわれた為に、軍の三種の分化は分離にならず統一していった。毛沢東は階級分野に基礎をおいた権力問題によつて泰山・根拠地・路線と戦争路線を打ち消し、建設（プロレタリアの陣型をつくること）と破壊（ブルジョア独裁を打倒すること）の両側面を統一し中国革命を勝利に導いた。同時にそれを持続的にアジア第三世界へ波及させ、「プロレタリア独裁の社會主義・共産主義への移行」と「世界革命の根拠地化」の統一の問題をも解決したのである。

第二次大戦以後アジアの共産主義者は、ベトナム革命・戦争とアジア反帝統一戦線をもつて新しい「インチーナ・シヨル」建設の中心的担い手として国際共産主義運動の舞台に登場してきた。従つて林彪の「農村が都市を包围する」態勢は世界革命を彼らが推進してきた事の当然の表現である。しかし中共の「四つの矛盾論」も林彪の表現でもなはだ平板なのは、そして現代の共産主義者が世界共産党をかちとることができないのは何故か？
テーゼもなはだ平穏なのは、そして現代の共産主義者が世界共産党をかちとることができないのは何故か？
被抑圧民族とそれに根本的に敵対する帝国主義大国との間をさえる部厚い壁（國家権力）をぶちやぶる事にまだ成功していないからである。だが、その中の真に革命的な部分はこのかべをうちこわし、眞の國際主義を獲得するため必死の苦斗をぐりかえしている。

一九六九年。それは過渡期世界を領導してきたアジア革命戦争グループがこの部厚いかべを解体する作業にとりかかつた時期であつた。その時赤軍がまさにそのかべ

を権力問題として意識したのである。

日本共産主義者が権力問題に立ち当つた時、中央権力斗争―前段階蜂起として毛沢東の「戦争路線」の側面から兵士の論理で迫ろうとしたのが赤軍であり、それに対してもM-Lは帝大解体―二重権力として「根拠地路線」の側面から大衆の論理で迫ろうとした。M-Lも過渡期世界統一論を抱もうとしていた。ところが彼らは自己を徹底して統括しなかつた。彼らが自分の路線に忠実ならば六九年一月決戦の敗北を正しく統括し、「佐藤政府打倒・八重総武装」をかちとるために六月「安保決戦」から起動した平和デモでもつて召還し、戦略部隊を入管戦線へ総撤退させそこから沖縄、部落を経て三里塚へ進攻する中カクに対抗しようとしたために民族・権力問題のかべをひたすらさせて進る反スタ排外主義の〇〇決戦の世界にまんまとはまりこみ解体した。反スタを解体するため反スタの土俵で斗おうとしたのである。ちょうど赤軍が武装蜂起を安保決戦の世界で斗おうとしたように。毛沢東は「弁証法とは分折を総合するという対立物の統一の法則であり、総合とはくいつく事だ。」といつている。(「毛沢東最高指示」) レーニンは「国家と革命」で「階級斗争を認めるだけでなく、プロレタリア独裁まで認めるのがマルクス主義者である。」といつてゐる。プロレタリア独裁を認めるというは主一客の攻防を主体において総合する(くいつくす)論理(権力問題)をもつことである。我々はこの主一客の主体における総合を攻撃型階級斗争―革命戦争と表現した。赤軍が革命蜂起論に対し革命戦争論を提起した時、革命論の根本的な問題を提起していくのだ。なぜなら「戦争は政治の経緯」であり、プロ独の論理―権力問題の政治は「敵を消滅し(くいつくし)味方を保存する」という戦争の法則において最も純化されて表現されるからである。革命戦争路線(権力問題の軍事への一面化)はプロの政治路線を直感的に表現していくのである。

それに對して「昨日羽田で今日安田、明日は成田か新宿か」という「〇〇決戦」の論理は階級斗争を認めてゐる。革命戦争路線(権力問題の軍事への一面化)はプロの政治路線を直感的に表現していくのである。「敵はこんなに悪い。ひどい。あんまりだーーー斗争アレバと日本との間の国境の解体」を要求する今日にあつてはそれは排外主義に転落する。かつて経済主義が帝國主義戦争の時代に排外主義に転落したように。現代では民族解放・社会主義革命戦争と眞に結合し得るようない否かの一切の分れ目なのである。

第三章 赤軍派の歴史―新しい内容と古い形式。その矛盾の展開

一、二章でのべた事を総合しておこう。赤軍は経済主義に対する批判として権力問題をもつて登場した。

われわれは國家権力を解体する作業を機動隊せん滅といふ軍事という形で提起された権力問題は一面的であり、古い政治路線の自然延長上のものであつた。一方被抑圧民族の権力問題を解決し世界革命を領導してきた毛沢東思想は帝国主義国の権力を解体する思想として飛ヤクさせる事が要求された。ここで赤軍が自己にさせられた任務が浮かびあがつてくる。世界的権力關係の「カバン」としての日本における権力問題を正しく具体的に解決する任務を与えたのである。アジア革命戦争と結合しうる日本革命の戦略・戦術を獲得する事が。

赤軍のつきだした新しい内容とは現代国际主義と権力問題である。古い形式とは政治過程論的政治(経済主義)の残りかす。それは権力問題の軍事への一面化―「軍事力学主義」である。新しい内容と古い形式とは矛盾していた。赤軍派の歴史とは国际主義の政治へ近づけば近づく程古い形式と矛盾し、ついには矛盾が極限にまで達し崩壊した歴史である。

A 國際根拠地路線

安保決戦を巡る大衆運動の延長上に蜂起を設定するか、

とくに蜂起の技術問題に端を発した二つの政治路線(政治過程論的政治理論と権力問題の政治)の間のブレに對してわれわれは後者の路線を選択しようとした。(パンフ

N.O. 5) 下からの党、戦術の党に対してあくまで上からの党、戦略の党を再確認し、それを可能にする為にづけなければならない。即ち前蜂をバネにして世界プロ独建設に着手するのではなく、それ以前から世界プロ独を準備する事によつて始めて一国の蜂起も可能であると

いう結論である。それを具体化しようとしたのが国际根拠地建設に専念したH・J作戦である。これは偉大な前進であつた。なぜならH・Jにより国境をとつぱし、朝鮮労働党のもとに飛しようした事は我々の第一に結合す

べき対象がアジアの共産主義者であり、朝鮮(労働党)が「連れ去」朝鮮労働党をオルグるという迷転した妄想が世界革命の根拠地であるといふ事を半分承認したといふ事である。「半分」というのはまだ「追んだ」我々

をもつていた事である。これはまさにアジア反帝統一戦線とインドシナ大攻勢に對して日本の方から国境をこえてアジアへ飛しようするという偉大な国际主義の実践であつた。

ところが、我々は新しい政治をあくまで追求めたにもかかわらず、かんじんの立きにく基盤が政

治過程論の延長一七〇年前後武装蜂起だつたのである。

前蜂をやるために前蜂といふ技術を導く基礎となつてゐるその当の古い政治を徹底して否定しようという矛盾、新しい内容と古い形式の矛盾はますます拡大し現実には六九年以上のみじめな破産を引き起した。綱領レベルでは朝鮮との結合が七〇年前蜂のために朝鮮で軍事訓練をやる事にわい少化され、組織上は指導部の国外への逃亡、日本での任務放棄を導き、技術上は大衆運動とプロレタリアートの組織化をぬきにした全くのクーデター主義をつくりだした。

ここで我々は全く出口がなくなり、七〇年前蜂を撤回し、前段階蜂起の根本的検討に入つていくのである。

B グリラ路線

我々こそが世界革命の総敗北を救う救世主であり、我々が敗北すれば世界革命は「テンボー」がなくなるはずであつた。だが現実はそうではなかつた。ベトナム労働党はジヤール平原奪還をもつて歎呼たる攻勢を開始し、世界革命の推進力がベトナム・インドシナ革命戦争にある事はだれの目にも明らかになつた。何故ベトナムは強いか。我々はそばくな感覚からベトナムに接近していつた。銃をとる事が如何に困難な飛やくを主体に迫るのか、この事を我々は蜂起の挫折を通じて身にしみて理解できた。ところがベトナムは——。ベトナム労働党万才!という従米の価値感の根本的転換はこのよだな主体的経験を基礎として行なわれた。だが同時に、ここでは軍事の粹(形式)を通じて民族解放・社会主義革命戦争をみたために、その意義を正しく全面的に抱えることができなかつたのである。

ともあれ我々は古い形式の中でアジア革命戦争に徹底して近づいていきゲリラへの路線転換をかちとつた。ここではゲリラ路線を最も首尾一貫した立場から導き出した花園同志の「自由への道」前段階武装蜂起の総括」(「構造」七〇年十二月号)を総括しておこう。この論文の骨子は從来の政治理論的政治過程論的政治理論の延長上の最高極限が前段階蜂起であつた。だが蜂起をもつて開始しようと矛盾し、前蜂は両者が未分化に融合していたものであつた。それ故古い政治を清算し新しい政治路線へ転換しなければならない。組織的には古い党の中から生まれてきた草(新しい政治の体現者)を古い党から自立させよ、というものである。同志は前段階蜂起が「古い政治と新しい政治との末分化に融合したものである」というその歴史的位置と、新しい眞の国際主義・権力斗争の政治理論をみごとに提起した。ゲリラ論のかく心はつきの点である。(日・Jの同志達が日本海上空で見たものは)「世界は平にして現に斗つてゐる事を発見したのである。世界は」

和ではなくてはなかつた。——我々だけが奴隸の平和を求めるアートに対する国際ブルジョアジーの同盟者であるといふ現実であつた。「私は日本の左翼諸組織の政治路線がいづれもこの「客観的現実」から出発することなく帝國主義大国の民族的特殊性の中の平和から出発している。事に今あせんとしている。」(傍点筆者)

このたぐいまことに国际主義の精神に満ちあふれた總括によつて我々は前段階蜂起の神話から解放され、権力問題によるアジアとの結合という赤軍誕生のかく心を把えた事が成功した。だがここで同志は綱領、組織、技術による三重の誤りを犯していた。綱領上は「世界武装プロ

論」がつまずきの仕となつた。世界の「客観的現実」や軍事の粹を通じてしか見る事ができなかつた点である。同志は政治過程論的政治・平和的大衆斗争・世界革命争政治(権力問題の政治)、武装大衆斗争と斗争形態で二つの政治の世界の違いをとらえようとした。従つて古い政治路線の清算からでてくる結論は平和的大衆斗争を切り捨てよ。一戦争斗争に純化せよ。である。かくして権力問題の軍事への一面化はゲリラによつてテロリズムへ転化した。

政治過程論的政治理論は必然的に大衆斗争の綱領的技術を生みだす。(この対立はまだこの段階では十衆斗争の左右の技術という大衆斗争の中にひそむ二つの要因にすぎない。)だが大衆斗争の極端的戦術の極限的延長は太衆斗争の対極に前段階蜂起を率き落した。こゝに至つて經濟主義の中心にひそんでいた左翼日和見主義という要素は前蜂という独自の形態となつて經濟主義的政治に対立する。だが今迄総括してきたように前蜂は不抵辯分化であり、むしろ末分化に融合した側面をもつていた。ゲリラはこの分化を徹底して完勝させた。かくして一方の極に經濟主義(権力問題の欠乏)と他方の極にテロリズム(権力問題の軍事への一面化)。だがテロリズムは經濟主義の本質を赤裸々に写したカガミなのである。自然発生性へのハイキという本質を。従つてゲリラ路線は古い政治から徹底してけつ別しようと、古い政治を裏返したに過ぎなかつたのだ。

この誤りに輪をかけたのが組織上は大衆の「ゲリラ」とは生成過程にある党である)という下がらの党建設のテロリズムを無批判的に受け入れた事であり、技術上は世界革命戦争の総反攻戦・全世界的内戦が今すぐにも始まると性急に結論を出した事である。

ゲリラ路線はまさしく悲劇であつた。古い形式(革労主義)の中で前進しようとするはするほど現実はその破産を極限にまで近づけていく。赤軍の前進は同時にその破産であった。党は早に解消され大衆斗争から完全に召還し、斗争形態は日本階級斗争とはますます無工

なものに転化していく。我々が世界一日本革命戦争と略
祿を定めた時、ベトナム人民の斗いに口先だけではなく本
當に連帶できる方法は何かをもさくし抜いた結果であつ
た。いわゆる「第三世界論」がもつていた権力問題抜き
のアジア革命戦争との連帶が実は没主導的なよりかかり
であり、まやかしの國際主義である事を鋭く感じとつた
結果であつた。ゲリラ路線は赤軍をいすこへと導いて行
のか。

○連合赤軍路線

第二次赤軍派の指導部が花園同志のゲリラ路線をどう
えていたかは別にして、問題は現実には第二次赤軍派
連合赤軍の斗いは「ゲリラ論」の忠実な実践であつた
ことである。

連合赤軍結成は直接には赤軍派と革命左派との武器に
する合同である。だがそこにはより巨大な意味がかくさ
れていた。第一章で述べたように我々は権力問題の基礎
においては國家の暴力装置は機動隊であつた。しかし武
装斗争にふみこみ「本気」で暴力装置を打倒する事を考
えた時、当然にも日帝という国家権力を構成・補完してい
る世界帝国主義の盟主一米帝との斗いを抜きにして日
打倒を実現する事はできない事。それを理解したのだ
。権力問題をもつたアジアとの結合」が問われる段階に
あつては、反米斗争の欠如は日和見主義・排外主義であ
る。かくして我々は「日本の左翼諸組織が帝国主義大国
の民族的特殊性の中の平和から出発している事」の真の
意味を把えはじめたのである。「日本革命の権力問題」
をもつてアジアと結合する」為のキー・ポイントは反米
だつたのである。即ち「日帝打倒だけでなく反米も」(一
これなら中カク派も言つてゐる。)といふのではなく日
帝打倒の為にこそ反米を斗がなければならないのである。
亦軍は革命左派との合同によつて銃を手にし始めて
困境に陥然とそびえ立つている赤軍・自衛隊の姿をみた
のである。我々と第三世界人民との間をさえぎつてゐる
国家権力(国境)の眞の姿をかいま見たのである。我々
は革命左派の反米愛國論批判を媒介に対米従属論のアン
チ・テーゼである「日帝自立論」を止揚する作業にとり
かかつた。赤軍はその誕生の秘密(本米の任務)を聞く
力ギを把んだのだ。敵は誰か。複合し相互に補完し合つ
てゐる米・日帝国主義である。味方は誰か。朝鮮、中國、
インドシナ人民である。そして日本の労働者人民である。

従つて我々の統一戦線は反米・反日帝統一戦線である。

我々はまだ漠然とではあつたが権力問題の輪かくを
意識し始めた。今や世界同時革命のちゅうしよう的
結果をはさとり世界革命の一環としての日本革命
のアジア革命戦争との連帶が実は没主導的なよりかかり
であり、まやかしの國際主義である事を鋭く感じとつた
のか。

戦略・戦術を。

日共革命左派と共産同赤軍派、それは共通の綱領
をもつた单一の党へと止揚されなければならなかつ
た。その事は同時に日共(スターリン主義)と新左
翼(トロツキ主義)の二分野を日本の地において行
止揚する斗かいを開始する事であつた。謀起は綱領
論争を開始する事。その基礎となる日本社会各階級
分析を行う事であつた。だが共産主義者にとって階
級分析の基礎は統計や資料ではなく生きた階級的実
践一大衆斗争である。大衆斗争は綱領・権力問題に
よつて正しく指導されなければならない。しかしそ
の綱領は大衆斗争の中からのみ生まれてくるのだ。
我々にとつて日本革命の性質をめぐる論争を検証する
物質的基盤が全く存在しないのだ。すなわち、武装
斗争にふみこむことによつて、我々は日本革命の綱
領問題を正しく提起する事ができた。しかし、止
りにその武装斗争が現段階で必然的にひきおこす大衆
斗争にふみこむことは、我々は日本革命の綱
領問題を正しく提起する事ができた。しかし、止
りにその武装斗争が現段階で必然的にひきおこす大衆
斗争から召還はその提起を解消することを不可
能にしたのだ。かくして新しい内容と古い形式の矛
盾は極限にまで高められた。一握りのゲリラはその
歴史的使命をおえたのである。綱領問題と一握りの
ゲリラ。どちらが新しい要素でありどちらが古い要
素なのか。答えは明白である。権力問題を綱領とし
て解決するという我々がついに到達した新しい政治
(軍事力学主義の政治路線)をきつぱりと解説し
清算することであつた。兎官僚に転化し、古い要素
を代表した連示指導部を一致結束して批判打倒しつ
くすことであつた。だが、我々はここで自己の思想
の歩みを徹底化させることを避け、正しく問題を解
決することに最後の最もかんじんな跳躍点で矢收し
た。

この児的敗北、思想的堕落の中で兎内斗争は不活
潰されたのである。すなわち、銃による競争結成。
綱領・思想でなく銃撃戦という軍事戦術が新旧結成
のテコとなる。ここでは古い形式は新しい内容を発
展させる進歩的可能性を失い、新しい内容をおし
どめる反動的因素に転化した。敗北は必至であつた。
たとえ晴れがなからうとも。

一赤軍派前史（共産間の分派）て終上席をうる

後史（日本労働への道）を斗いとらる

もし自己の実感の意味を意識化する作業に徹底して忠告主義、排外主義に陥つていくのと同様である。従つてあつたなら——。しかしどんなんに悔んでみても殺された一四名の同志達も、死刑一無期が予想される銃撃戦を斗い抜いた同志達も我々の手許にいらない。我々に残る事ある道は日本労働党建設の粗い手であるべきであつた。彼らの歴史的役割を受け継ぎそれを一致結束して果しきる事である。アジアの共産主義者に学び結合して日本労働党を建設する事。これは日本の共産主義者に誅せられた最も緊要な任務である。この歴史的任務を正しく意識化し人類史の巨大な流れの一員として斗い抜かなければならぬ。（〔新しく内容を開放しつくす新しい形式。〕）我々は余りに巨大な犠牲をはらつて権力問題にいきついた。しかしここで二つの事を銘記しておかなければならぬ。「他のやつは解つていない」というのではなく、我々は余りに巨大な犠牲をはらつて権力問題にいきついた。しかしここで二つの事を銘記しておかなければならぬ。第一は歴史の糸にたぐりよせられ同じ問題に行きつくるは決しい我々だけではないであろうと。第二は「他のやつは解つていない」というのではなく、我々は余りに巨大な犠牲をはらつて権力問題にいきつた。しかしここで二つの事を銘記しておかなければならぬ。第一は歴史の糸にたぐりよせられ同じ問題に行きつくるは決しい我々だけではないであろうと。第二は「他のやつは解つていない」というのではなく、我々は余りに巨大な犠牲をはらつて権力問題にいきつた。しかしここで二つの事を銘記しておかなければならぬ。第一は歴史の糸にたぐりよせられ同じ問題に行きつくるは決しい我々だけではないであろうと。第二は「他のやつは解つていない」というのではなく、我々は余りに巨大な犠牲をはらつて権力問題にいきつた。しかしここで二つの事を銘記しておかなければならぬ。第一は歴史の糸にたぐりよせられ同じ問題に行きつくるは決しい我々だけではないであろうと。第二は「他のやつは解つていない」というのではなく、我々は余りに巨大な犠牲をはらつて権力問題にいきつた。しかしここで二つの事を銘記しておかなければならぬ。第一は歴史の糸にたぐりよせられ同じ問題に行きつくるは決しい我々だけではないであろうと。第二は「他のやつは解つていない」というのではなく、我々は余りに巨大な犠牲をはらつて権力問題にいきつた。しかしここで二つの事を銘記しておかなければならぬ。第一は歴史の糸にたぐりよせられ同じ問題に行きつくるは決しい我々だけではないであろうと。第二は「他のやつは解つていない」というのではなく、我々は余りに巨大な犠牲をはらつて権力問題にいきつた。しかしここで二つの事を銘記しておかなければならぬ。第一は歴史の糸にたぐりよせられ同じ問題に行きつくるは決しい我々だけではないであろうと。第二は「他のやつは解つていない」というのではなく、我々は余りに巨大な犠牲をはらつて権力問題にいきつた。しかしここで二つの事を銘記しておかなければならぬ。第一は歴史の糸にたぐりよせられ同じ問題に行きつくるは決しい我々だけではないであろうと。第二は「他のやつは解つていない」というのではなく、我々は余りに巨大な犠牲をはらつて権力問題にいきつた。しかしここで二つの事を銘記しておかなければならぬ。第一は歴史の糸にたぐりよせられ同じ問題に行きつくるは決しい我々だけではないであろうと。第二は「他のやつは解つていない」というのではなく、我々は余りに巨大な犠牲をはらつて権力問題にいきつた。

最後に綱領建設のために必要な立きやするべき基本的立場の骨格だけを提起しておきたい。（よりくわしくは「革命的大衆運動の発展についてのいくつかの問題点について」を参照していただきたい。）

一 我々は断呼として世界共産党建設を斗いどらなければならぬ。この点についての赤軍派のかくしんはいささかもゆるがせてはならない。

二 民族解放・社会主義革命戦争と断呼として連帶する。

三 非抑圧民族人民に帝國主義の矛盾が最も集中しているが、彼らと第一に連帶できる政治をうち出さない限り必ず非外主義に転落する。下層プロレタリアと連帯しない組合運動がどんなに口でプロレタリアの解放をさけんでも絶対

—19—

三 赤軍派の革命戦争路線の批判を今まで行なつてきた大連と毛慶運動を一步発展させている。彼らこそが世事。それを全人民に明らかにしなければならない。外共産主義運動の中心環である事をはつきり認める事。がそれは武装斗争を斗う党の基本政治路線が誤つてゐる。中國・朝鮮・ベトナムの共産主義者は列寧の到達した大連毛慶運動を一步発展させている。彼らこそが世事。それを全人民に明らかにしなければならない。外共産主義運動の中心環である事をはつきり認める事。

四 我々の統一戦線は米帝の侵略戦争に反対し、日帝のからである。しかしそれと武装斗争を否定する事とは全く別である。マルクス主義者はあらゆる斗争形態を認めなければならないし、レーニンが述べたように「武器をもたない階級はドレイの階級である。」

四 我々の統一戦線は米帝の侵略戦争に反対し、日帝のからである。しかしそれと武装斗争を否定する事とは全く別である。マルクス主義者はあらゆる斗争形態を認めなければならないし、レーニンが述べたように「武器をもたない階級はドレイの階級である。」

五 第三世界と日本の結び目である在日朝鮮・中国人、沖縄人民の斗いは日本の革命派と人民にとつてその思想性、政治性を徹底して國際主義的なものにするための試金石である。彼らとの連帶の中で帝國主義大国の民族的特殊性の立場、及びそのイデオロギー的反對基盤をつめなければならない。（反米反軍統一戦線による共通綱領と各階級・層の社会主義革命をむけた最小限の性質はあくまで社会主義革命である。）

六 「共産主義と労働運動の結合」の条件はしだいに整いつつある。新左翼にとつて60年代はその党派・人間が革命的かどうかの第一の基準は、だれが最も権力に対して戦闘的に斗うかをもつて計られてきた。この価値基準は不充分な未熟なものであり、後の赤軍へ至る基礎を移しかえる必要がある。そして人民の民主主義の為の斗争基盤を下層労働者を政治的中立とすることを階級に立たなければならぬ。

七 その思想的基盤の上に我々は60年代の学生層という連帶基盤を下層労働者を政治的中立とする労働者階級に立たなければならぬ。したるものであるが、當時にあつてはそれなりに正当な基準であつた。しかしこの間の階級斗争の中ではその様な件のものでは反動的なものである事が明らかになつてきたり。我々は自らの忠誠性・最終目標を一点もくもらせる

ことなくしつかりと労働者階級に依拠しなければならない。

して反対しよう！

がそのことを若き共産主義者に緊要な第一の任務として迫つているのである。したがつて、現在誰が最も革命的

かの基準は単に口先だけではなく現実に労働者階級に依拠し、広範な労働者を起ちあがらせ、政治権力奪取をめざした斗いとして組織することにどれだけ真陥に斗つて

いるかをもつてはからなければならない。そして、同じ労働者でもより矛盾の集中した階層に依拠しようとしている部分がより革命的なのである。この点を忘れて赤

軍派の再建―日本労働党建設を語るなら言葉はどんなに目新しいものでも必ずしも長い目で見るなら發展性がなく、ついには反動的なもへ転化していくてしまう。我々の勝ちとるべき綱領はそんなにこむずかしいものでなく世界の大勢と新しい世界を担う主体と、統一戦線を構成する各階級の何を解決するのかを具体的にさしはじめしたのである。一方では、原則や綱領といえば「関係ない」という風潮が強いがそれは誤まっている。「関係ない」のはいくらきいても人民の何を解決するのかさっぱり分からぬような綱領であつてそれをもつて原則を輕視するのは大衆に依拠すると称し大衆を弾よけに使う思想である。

以上の一一六の内容をスローガン化しておく。

◎マルクス・レーニン主義・毛沢東思想で赤軍派を再建しよう！

◎社会主義革命万歳！

◎武装蜂起を準備しよう！

◎（四の領域）アジア人民の共通の敵・米日帝国主義を打倒するための反米帝反日本軍国主義統一戦線を形成しよう！

◎（三の領域）人民戦争の陣型をつくりだし、人民総武装蜂起を準備しよう！

◎（四の領域）アフリカ人民の共通の敵・米日帝国主義を打倒するための反米帝反日本軍国主義統一戦線を形成しよう！

◎（五の領域）在日朝鮮・中國人・沖縄人民、と固く連帯し、下層労働者を中心とする人民大衆と結合しよう！

◎（六の領域）眞に労働者階級に依拠し、具体的現実から学び得る共産主義者への自己改造―整風運動をおしすすめよう！

（戦術的な問題として）

◎アメリカ帝国主義を全アジアからたたきだし、日本軍国主義を打倒しよう！

◎ベトナム革命戦争と連帯し、日帝の侵略加担をとん阻止しぬこう！

◎朝鮮南北共同声明断固支持！自華・日韓・日米安保の三條約即時破棄！

◎日帝の経済危機の日本人民に対するしわよせに徹底

をもつてゐる革命的な大衆運動の發展こそ最も重要な戦略的なものである。いいかえれば、革命的で、政治闘争と武装闘争の結合とその發展は革命的な大衆運動を離れてはありえないということである。われわれのうちだす路線は、革命的準備し組織せよ、といふことである。

一、革命的な大衆運動の担い手について
マルクス・レーニン主義の觀点からすれば、階級社会における最も基本的な問題はどういう階級的立場にたつかといふことである。赤軍派もふくめて「新左翼」運動の悪い側面（主觀主義・内ゲバ主義・セクト的傾向等）を分析してみれば、つまるところ、この階級性という基本問題においてあいまいであつたといわざるをえない。あいまいといふのは、首尾一貫していはず主觀の世界で一人歩きしていいたといふことである。しかし、最近、労働者階級の下層に断固として依拠しなければならないとの自覚が強くなり、すでに釜ヶ崎などにおいて具体的に実践にとりくんでいる。

「新左翼」運動の主要な担い手は、青年・知識人であつたが、その主要な特色はきわめて敏感であるがせまいといふことである。日本の反動権力と世界の反革命同盟の本質をみぬき、さまでなく、世界の基本すう勢へ資本主義社会から社会主義社会へに敏感であることから発している。しかし、こうした歴史の基本すう勢を認識するだけではまだ不充分である。問題は、こうした歴史的基本すう勢をつくりだし実現していくのであるのかといふことである。

マルクス・レーニン主義の原則とこの間の経験によれば、こうした問題の分析においては必ず具体的現実から出発しならない。日本において社会主義革命とプロレタリア国際主義の二つの責務を果さんとすれば、必ずしも本の客観的な社会階級分析をおこなわなくてはならない。具体的現実から出発するならば、まず、現実を充分に調査研究し現実を客観的に把握することが不可欠な条件である。調査研究にあたつては、必ずしもマルクス・レーニン主義の思想・立場・方法にもとづいて調査研究のそれぞの対象に応じて正しい調査研究の方法とらねばならない。こうした面でわれわれはかつてきわめて不充分であり、主觀主義・一面性の傾向にわざわいされていたが、大胆に革命的な

は必然じつくりと克服せねばならない。さて、日本の階級分析で大ざつぱに分類してみると次のようにいえるだら。もともと、まだきわめて不充分で一面的かもしれなが、しかし、大ざつぱな提起 자체はそれなりの意義をもつてゐるだら。しかし、政治・軍事・経済上において支配階級に属するのは、独占ブルジョア階級・反動高級・及びそれらの政治軍事的手先であり、この支配階級の性格である。

階級は本質的に反動的反革命的であり打倒対象である。自民党的な階級的性格は主としてこの支配階級であり、本質的には支配階級の忠実な同盟軍である。しかし、副次的な側面として支配階級と矛盾する側面をもつてゐる。自民党は本質的には支配階級の政治を代弁してゐるがその政治的基盤でこうした同盟軍を利用している。上層都市小ブルジョア階級などはいわゆる中間階級であり、本質的には支配階級の忠実な同盟軍である。しかし、副次的な側面として支配階級と矛盾する側面をもつてゐる。自民党は本質的には支配階級の政治を代弁してゐるがその政治的基盤でこうした同盟軍を利用している。

総じて、ブルジョア階級は日本人民大衆にとつて打倒すべき階級敵である。われわれは労働者階級の立場にたち、農民・都市小ブルジョア階層の果たすべき役割は革命においてきわめで大きいものであるが、その役割を更に大きいものにし、とにかく下層労働者の階級性を学ばなければならないし、とくに下層労働者の階級性と團結面においてはきわめて不充分であり、それゆえ戦闘と工作においてはそれなりの意識と経験があるがしかし階級性と團結面においてはきわめて不充分であり、それゆえ戦闘と工作の面において首尾一貫したものになりえなかつた。

さて、革命的な青年・知識人の決起だけではなく、この間の三里塚闘争・釜ヶ崎暴動・部落解放闘争・沖縄闘争や相模原闘争などの反基地闘争・合理化右傾化に抗した戦闘的労働運動・入管反対運動などを見れば、この間ますます大衆運動がより広くより前進をもとめてゐることがわかる。当面革命的な大衆運動はさまざまに迂余曲折を経ながらも一大決起に向け全面化する可能性をもつてゐる。そうであればあるほど、革命的な大衆運動の階級的担い手とわれわれの階級的立場の問題により一層関心を抱いていかねばならない。

ところで、革命的な大衆運動を大胆に発展させ、社会主義革命の有利な条件を形成して

いくためには、必ずわれわれがかちとるべき革命の中心目的（プロレタリアートの指導による政權奪取）のための必要条件を把握しなければならない。もなければ、いくら革命的に大衆運動が有利により広くより深くなりつつあるといつてもそれがただちにプロレタリア革命の基本的な客観的必要条件を構成するものになるとは必ずしもいい得ないからである。たしかに、革命は予想することはないが、しかし、マルクス・レーニン主義の理論と客観的な具体的現実を考察すれば革命情勢を準備するにあたつての主体的必要条件をにつめることは必要であり、また可能である。ではより具体的に考察していこう。

日本の革命運動を勝利に導くためには、次の点に注意しなければならないだろう。

1、日本は資本主義が高度に発展していく経済における基幹産業の占める位置がきわめて大きいため、基幹産業の労働者全体の決起と解放が社会主義革命・プロレタリア国際主義の勝利のための最も重要な基本要素となつてゐるということ。

2、しかし、釜ヶ崎労働者をはじめとして下層人民（特に労働者下層）は常に抑圧と収奪・搾取を激しく受け

ており、こうした下層人民の決起は、日本の革命的大衆運動の發展の死活問題である。下層労働者は確かに最も矛盾をうけているが、しかし、ひとたび決起すれば政治的自覚と自由をかちとるのがきがめて早い。下層労働者は、基幹産業に広範に存在しており、また基幹産業の周囲にも広範に存在している。したがつて、当面の革命的な大衆運動の強力な發展の基本推進者となりうるであろうし、ゆくゆくは全労働者階級の決起の主力軍となるであろう。

3、日本では、都市化がはじめて發展しており、国内のあらゆる矛盾が主として都市の下層人民に集中しだしておらずがなされているのであるが、しかし農村の下層人民にもかなりのしわ寄せがなされている。ブルジョア反動権力が取つてゐる反動と侵略の諸政策、搾取と収奪の諸政策、人間性無視と抑圧の諸政策、これらの諸政策を破綻させ、プロレタリアートの指導する政權奪取を勝ちとするためには、都市の人民のみならず農村も含めた全人民の決起とそれによる解放以外にない。

ともあれ、当面の革命的な大衆運動の發展は、さまであるが、日本の革命構造的根本的改造・政治的主力軍の問題・及び下層人民の解放の問題に基くものである。

この三つの点は、まとめていえば、日本の經濟的下部化していくだろう。そうであればあるほど、日本の革命的な階級的担い手の問題、当面の革命的な大衆運動の実際的な担い手とより強力な發展のための階級的担い手の問題、及びわれわれの階級的立場の問題により一層の関心をはらつていかなくてはならない。

二、民王主義と社会主義の結合の問題について

日本のここ百年の歴史をみてみると、はば四回の革命があり、第二回目は一九百年代の前半までの大衆運動の高揚である。第三回目は終戦直後の十年間の大衆運動の高揚である。各々の高揚の後には、反動と侵略の高揚である。各々の高揚には、反動と侵略の時代がつづいているが、しかも、それも長くは続かず、史により革命的な大衆運動の高揚を準備している。

すべてこうした国内の革命運動の成長と発展は、全世界の社会主義運動とプロレタリア革命運動の成長と発展と不可分に結びついている。偉大なマルクス・レーニン主義の革命理論はますます歴史的正当性を獲得し、不抜の金子塔をうちたてた。資本主義社会から社会主義社会への歴史的發展の必然性は、二十世紀全体の基本方向となつてゐる。この歴史的發展方向の推進者であり、かつ指導者であるプロレタリアートは、眞に革命的で戦斗的である。それは、政治制度においてもまごうことなく示されている。

さて、民王主義は共産主義を内包し、ある歴史的發展段階で民王主義は共産主義を外化し、ついには民王主義は共産主義によつて止揚される。レーニンが「國家と革新的發展段階においてかちとられた民王主義は以前のどの歴史的段階にも、それ、異なる、あるいは、ブルジョア階級がブルジョア階級の政治制度は、ブルジョア階級の政治制度を破壊したその結果の上に構築されるものであり、ブルジョア階級がブルジョア民王主義を用いて階級独裁をうちたてていたそれら一切を本質的に止揚するものである。しかもなお、中国の文化大革命・キューバ・北朝鮮等々の経験によれば、社会主義革命を経たあともたえずタリアート

トこそ真に革命的であり、眞に戦斗的であるが、それは古いブルジョア的政制度をうちこわし新しい革命的な政治制度を樹立する際ににおいて首尾一貫して示される。民主主義の内実もたえず發展させついには共産主義の政治理社会制度へと止揚していくことができる。プロレタリアート

うなものであらうか？それは、一言でいえば、どれほど大家的であり、どれほど根柢的であるかということであ

それはこうした尺度からより具体的にみてみよう。

今の日本のブルジョア民主主義の内実は、さわめて専制的で抑圧的であることは明らかである。日本では地主が高級に發展していって政治・経済・軍事等の権力を握り独裁しているのである。国会・内閣・政府官僚らの間にほんのひとにぎりの独立ブルジョア階級が実

では労働者人民の利益は辻殺されている。ブルジョアジエ・警察・監察官・法機関・裁判所・檢察官・傳導官等は、独占権を握り独裁しているのである。国会・内閣・政府官僚

では労働者人民の利益は辻殺されている。ブルジョアジエは本質的に反動的であり、それはこうした彼らの強制手段でさえもたゞより彼らにとつて好都合なものにて、より専制的なものにて、より抑圧的な手段へと改憲せらうとする傾向にみられる。資本の利益の盲者・ブルジョアジエは、あくことのないときのことのない利潤の慾望の奴隸であり、それは政治制度においてより完全な專制的な支配制度への願望となるつてあらわれるのである。これに反し、ブルジョアジエは日本人口の多数を占めてゐるが、自らの利益と解放が同時にブルジョアジエ以外のあらゆる階級・階層の利益・解放とを本質的に一體化しておき、ブルジョアジエの支配制度を打倒しブルジョアジエの階級性を廢止することによつて全人民・全民の解放の指導者としての崇高な使命をおびてゐる。したがつてブルジョアジエもブルジョアジエとともに一定の共通の政治的利益を有してはいた。しかし、資本主義はあらゆる封建的要素・ブルジョアの要素をしてまるから資本主義社会への激烈な政治革命の時期においては、ブルジョアジエがらん然し、しゆう気ふんぶんたる腐敗が日にあまるものとなつてゐる時、一方では徹底した專制者・独裁者・抑圧者としての本質を如何なく發揮するといふ、こうした矛盾の発展はいずれにせよ歴史的結構をつけざるをえない。それは反動派は必ずしも勝利するといふには必ず勝利するといふ方向で。ともあれ、ブルジョアジエ階級獨裁の發展した段階においては、ブルジョアジエは民主主義の内実をより革命的に發展させたり大衆的・内実を狭めより専制的にせんと立つ。(そのいい例が、憲法改悪の願望であつてわれわれは次のように分折することがであります。ブルジョアジエにはない、ど。ブルジョア階級の下でのブルジョア民主主義とブルジョア階級独裁の二つのブル

レタリア（社会主義的）民王主義とは全く相反する階級

概念である。階級社会のあらゆる矛盾は階級矛盾であり、民主主義という概念も階級概念以外の何ものでもない。ヨアジエは「一ハ一票」「公明正大な一票」といういかにも形式的には超階級的なものであるかの如く見せかけ、専制的には（独占）ブルジョアジエの独裁專制を徹底して貢献しようとする。そしてあまつさえ、改良的にせよほんの少しでも労働者の大衆的な傾向が彼らの政治独裁手段の一部分にでも反映しようすればただちに自らの独裁手段を破壊してまでもその支配を廃止しようとするとする。（裁判所内のレッドバーシ等）

ともあれ、歴史の發展の原動力は階級矛盾であり、革命が反革命を壓倒すれば歴史は進歩に向む、逆に反革命が革命を圧倒すれば歴史は反動に向む。政治制度をめぐるブルジョアジエとブルジョアジエの激烈な斗争は決つして平和共存の方向に向む。ではなく、内在的な矛盾の完全な成熟と二者拓一の爆發までぬきつかざるをえない。その矛盾・斗争の歴史はブルジョアジエと人民が政治権力をブルジョアジエから完全に奪取するまでに何回となく大小規模の爆發を経過し、更にブルジョアジエ階級を樹立した後でもまだその本質的な矛盾・斗争は続行される。こうした過程は、日本のブルジョア支配のここ百年間の歴史においてもその各々の大衆運動の高揚とその後に続く反動と侵略の段階での民主主義の内実の發展・前進・後退の運動を見れば一目瞭然である。ア階級独裁を樹立した後でもまだその本質的な矛盾・斗争は続行されることは、同時にそりとした実践の前進の過程では、必ずわち、当初日本人の民主主義運動はブルジョアジエとブルジョアジエの両者の性格を内包したものとして登場していたが、しかし次第にブルジョアジエ的性格を失して去りそれと敵対しブルジョアジエの性格を明確にしてしまうこと、同時にそりとした実践の前進の過程では、大衆運動が高揚すれば民主主義の内実はより大衆的なものにより進歩的なものを追求するようになり一定の前進が勝ちとられ、逆に侵略と反動の風が強くなれば民主主義の内実はつまり専制的となることである。支配階級が自らのブルジョアジエ革命と支配階級としての自己形成をかちとるのに一定の封建的専制的要素（天皇制）を利用しなければならなかつたが、ともにかくにもそうすることで、その結果ブルジョアジエ民主主義運動が發展する徹底して第二次大戦の敗北によつて破産し、ブルジョアジエの支配体制が大打撃をうけたとき米帝国主義の兇悪な本性と手を結び、今度は米帝の援助の下で独占ブルジョアジエのより強力を支配のための政治制度をうちたてた。しかしながらこの側面を中途半端なものにして成功した。そして、帝国主義的本性（毒をくらつてますます毒を求める）が

本独占ブルジョアジエはブルジョアジエ人民の力を無視することができず最小限の要求をのみこみ、かくして

ブルジョア民主主義の日本歴史上一步前進した援助の産物

物である日本国憲法がうみだされた。しかし、ここ二十年間の過程で独占ブルジョアジーはそうした援助の制度をいかに破壊してより専制的なより弾圧的な政治支配の道をうちたてるのにきゅうきゅうとしてきた。というのは、巨大に発展膨張した日本独占資本は帝国主義的侵略の要求となつてあらわれているからである。こうした教訓は、もはや單にブルジョア民主主義運動の革命的側面をのみ要求するだけでは片手落ちであつてブルジョアジーの支配制度の土台を完全に破壊し（すなわち独占資本主義を廃止し社会主義経済改造を行うこと）それと同時にブルジョアジーの政治への参加のあらゆる一切の可能性に道をとざし彼らの階級を完全に廃絶すること、そしてこれらを実現するために、全く新しいプロレタリアート、独裁の革命的な政治制度を樹立することが必要であるといふことにある。第四回目の革命運動の高揚の中でこうしたことは新左翼運動の若き國士たちによつて実践的諜報とされたが、それは同時にブルジョア的改良主義議会主義・修正主義等と一線を画し彼らとの和見性から自己を分離させ革命原則に忠実な政治革命理論を独立させることができた。現在の諸々の大衆運動はこうした革命的要求と同時に、ブルジョア的でもつてもかちどられた民主主義の一歩前進した内実の防衛と更なる前進という要求を含んでおり、入りこんでいる。しかし、明確なことはマルクス・レーニン主義だけがそしてブルタリアートの前衛・共産主義者の革命政党のみが真に民主主義運動の行く末を正しく指導することができるということである。日本のブルタリアート運動の成長は、今や支配階級（ブルジョアジー）に民主主義があれは被支配階級（プロレタリアート人民）ではなく、又その風が強まれば民主主義の内実は狭まりそれどころか民主主義の実質的な一片のかけらもなくなる（たとえ少しの逆であることを明確にしてある。大衆運動が高揚すれば民民主義の内実はより大衆的になり逆に侵略と反動の風が残そうとも）といふ太小の過程を、日本人民はすでに三回も経験し、そうして今や四回目の経験をもつており、革命的大衆運動の発展と成長を、日本人民が一步一歩経験と理論を着実につみ重ねており、確実な帝國主義の完全な没落衰退が全世界のブルタリアート人民の手によつて更に追跡をかけられている今や、われわれにはただ前進があるだけである。

ブルジョアジー諸君／とくにほんのひとにぎりの少数

の古い（すなわちブルジョア的）時代でいうべきだ。政治制度をいふと權謀術策をめぐらせてきたのだ。政治制度をうしようと權謀術策をめぐらせてきたのだ。政治制度をさえも終始一貫して破壊し続けてきたのだし、つねにての古い（すなわちブルジョア的）時代でいうべきだ。政治制度をめぐつて最後の懲りがきをしている君達は、自らの政治制度に目ら死刑を宣告し続けてきたのだ／もはや、うしようと權謀術策をめぐらせてきたのだ。政治制度をただただ君達の政治支配制度をきれいさっぱりと物理的に一掃するだけである／そして歴史の博物館にとじめておくだけである！

現在の革命的な大衆運動の力は、ブルジョアジーの政治支配制度の少しの後もどりもみのがしはしない。革命的な大衆運動は、大胆に日本の社会主義革命とプロレタリア国際主義の二つの重要課題の実現のためにさまざまに広範な人民大衆の力をますます統一して真に強力な革命運動へと成長していくであろうし、又そうさせなくてはならない。言葉上で難を恐れずいえば、現在の革命的な大衆運動は社会主義と民主主義を結合させている事にある。それを統一している事にある。逆に、今後革命的大衆運動がますます確固不動のものとなるにはならない。言葉上で難を恐れずいえば、現任の革命的な大衆運動の力の秘密は社会主義と民主主義を結合させている事にある。それを統一している事にある。逆に、新左翼運動は、一つの政治勢力を形成しマルクス・レーニン主義の原則を守り実践運動にそれを適用してきた。更に、全国いたるところに革命的な戦斗的な共産主義者達は、充分な形で革命の眞の物質力（人民大衆）と全面的に結合してはいない。が、自然発生的な政治斗争のあらゆる高揚・成長等前進に助けられて、こうした古い共産主義者達もこうした若々しい成長しつつある。新しい共産主義者達の一群に加わり、見せかけてない革命的な共産主義者達の眞の統一と團結への努力がセクトとして革命的な統一戦線運動が本格的に登場する時、当たった何百万。何千万の一大決起と革命情勢を準備することができるであろう。全世界から反革命反動派・帝國主義者とその同盟ーを一掃するプロレタリア国際主義の革命的任務を、日本の地においても強力に準備し実行する主體的力をうちかためるのは、そして全世界的だけな全面的な勝利を樹立する主體的力をうちかためるのは、こうした方向でしかあり得ないであろう。

結論は、今やますます明白である。民主主義と社会主義のより強力な統一を日本の地の共産主義者がセクト主義・分立主義を排しつつ意識的におし進めること、これ

である。このことは、当面の革命的な大衆運動が畢竟よきに大きな決起をめざすというだけでなく当面の革命的な大衆運動が内在的に要求する来たるべき徹底した政治革命の姿を明確にし、それへと飛躍させることである。たとえ、一時的にせよ、敵階級の弾圧が強化され、一定の困難な道をたどらざれようとも、このことは決してその革命的な意義を失わせるものではなく、そうであればある程より断固として戦斗的に要求されるであろう。われわれ労働者人民は、日本のブルジョア支配時代を一世紀にもわたつて甘んじて来た。だが、今やもうこれ以上この時代を一刻でも続けさせることはいかないので。それだけの物質的・精神的力量はうちきたえられてゐるのだ。いつの時でもそうであるが、大衆運動が革命的な側面をより發揮する時本当に生き生きとしているものである。だが、今、直面しつつある革命運動は以前のどのときよりも光り輝いてゐる。すなわち、あの歴史博物館にある明治維新が、今や資本主義社会の終末のために日本ブルジョアジーの死刑のために再現しつつあるのである。

三、思想方法における弁証法的唯物論を確立することについて

レーニンが述べている様に「ただ革命家だけの手で革命をやることができる」と考へることは、共産主義者がおかす最大の、そして最も危険な誤りである。反対に、革命家はただ真に生命力のある元進的な階級の前衛の役割をはたさうだけであることを理解し、これを実行にうつす能力をもつことが、あらゆる重大な革命的活動の成功のために必要である。」さて、ここで注意する必要があるのは、こうしたことはわれわれ誰もが認識しているし、そんなことは直面している革命運動にとって今更何も問題はないといつてそのあまりにも一人よがりになつてゐる傾向である。マルクス・レーニン主義の革命的な弁証法的唯物論の立場からすれば、実はこうした主張と傾向に対しても大きなおとし穴がありきわめて注意にせよ、無意識にせよ、弁証法的唯物論の誤をかかけながら実は弁証法的唯物論を正しく理解していはずそれに反しているという傾向に対しても、やはり断固として批判しなければならない。

この間のわれわれの経験（新左翼全体の経験も含めて）からすれば、本当に弁証法的唯物論にたつてゐるかどうかの問題は次のように考案されるべきである。すなわち、ある革命家が「革命家だけの手で革命をやることができる」といふのは全く誤まつてゐる、と單に自覚しているだけでは全く不充分であるということである。問題は、

この問題は、形而上学と弁証法、観念論と唯物論のどちらの立場にたつかの問題である。革命政黨の路線が形而上学であり観念論であるとすれば、それはつまりもその目的を達成することはできないし、たとえ一時的にうまくいっても決つして首尾一貫したものとなれば、いくらその革命政党が立派な目的をもつていようともやがては必ず一時の勝利の成果を反動派の手にゆずりわたしてしまつだらう。

わが赤軍派は、過去に革命運動の発展のために過るなければならぬ鋭い指摘を行なつた。たとえば、軍事政府樹立の問題なり、武装蜂起・ゲリラ戦の問題なり、軍事路線の問題なりにおいてある。しかし、その問題を意識的に実行しようとした段階で数多くの失敗と誤まちを犯してゐた。その正な原因は、形而上学と観念論において不充分であつたからである。軍事を第一とする、武装斗争を革命運動の唯一の斗争形態とする、銃をとることを全てにせまる、などの傾向はこうした形而上学と観念論を主導する「もあ主觀主義の軍事面への反映である。今、われわれの内部でこうした過去の悪い傾向一軍事を第一とする」などといふ傾向を克服し、政治を第一とするといふ傾向がみられるからである。その一つは、「武威による政治」をとなんえるものであり、これはやはり一種の軍事的にも狭小路にはまりこんでしまうだろう。軍事及び軍事を第一とする「傾向である。これは発展すれば、政治を第一とする」とする「傾向である。これは発展すれば、政治を第一とする」とする。結局のところ、政治的には充分な効果をかちとれず、軍事的には政治を第一とするで出発しながらやがては武威による政治」をとなんえるものであり、これはやはり一種の軍事的にも狭小路にはまりこんでしまうだろう。軍事及び軍事の者がすぐさま正しくうちだし、実践することができると考へることは誤まつてはならない。もう一つの傾向は、誤まちをくりかえしてはならない。もう一つの傾向は、その反対に、軍事を第一とする、を克服しようとしない。武威の問題は、正しい政治路線に指導されてはじめて窮屈することができる。もつとも、軍事路線については未だにかくみなければならない。

しかし、重要な誤まちに気がつけは、必らず二度と同じような傾向である。これは誤まつた日和見主義の一端である。たとえ、今すぐ「われわれみんなが武器を取りべきではない」と思っても、この間の経験を大切にし、軍事的

教訓をとらねさせないなものでも積み重なるべきである。

こうした態度をとらず、いつかできるであろうと考えるのは誤まつてゐる。

ともかく、今われわれ内部で軍事を第一とする過去の傾向を克服しようといふ自觉と認識が高まつてゐる。これは、総括の姿勢としては全く正しい姿勢である。この姿勢は、単に軍事面における王觀主義の反映を克服するという側面だけではなく、思想的な問題としては、過去のわれわれの主觀主義を克服し正しい弁証法的唯物論をしつかりと自らの理論のための武器とするという立場から発せられてゐるし、そうでなければならない。しかし、こうした立場に首尾一貫してたつのではなく、きわめて中途半端なものにおしとどめ、「政治を第一とする」といひながらあげくのはてに弁証法的唯物論の立場にたつていない古い政治の傾向にどっぷりと身をつけている(註)。いかつて、ブンドは「世界プロレタリアート独裁」を主張し、その主張こそ自分たちの党派の政治的優越性を示すものであると自負してきたことがあつた。しかし、それを主張すること自体は大きな全世界の革命方向の問題提起であつても、そのことはいささかも「革命的であるか」の判断基準とはなりえない。革命家が本当に「革命的であるかどうか」の判断基準は、單にどのような口上をとなえていても、その者といふ者も「革命的であるか」の判断基準とはなりえない。革命家が本当に「革命的であるか否か」の判断基準は、單にどのよだな口上をとあるのである。いくら大目的大方向が正しかつても現実にそれを実現していくさまざまな過程と運動の方針をも正しく提起して現実の物質力に依拠しなければ決つして目的的・方向を実現しえない。又、そうした目的・方向が正しいか否かは現実の内在的發展法則に客観的に合致しているか否かにある。ここでは、二つの問題がある。一つは、正しい目的・方向が本当に革命的であり正しいと判断されたのはその目的・方向が実際に現実的物質力をもつか、あるいはもちうる条件を充分に有しているときのみであること。

もし相手の意見を低次元だと断定し、どのような意見であろうともその意見の背景に科学的な根拠が存在しないが注意深くおごらす見ようとしないなら、そうした作風は必らず自らの意見の道すじに壁をたてることになるだろう。革命的大衆運動を大胆に发展させ、かつ共産主義者の意識的斗争を大胆に发展させ、両者を強力に結合させるためには、こうした弁証法的唯物論の立場にしつかりとたち、形而上学と觀念論に反対しなければならない。

(注) 捜入する」という傾向には断固として

批判しなければならない。

以上。